

平成 28 年度事業報告について

平成 29 年 6 月

公益財団法人大阪市博物館協会

平成28年度事業報告について

はじめに

平成28年度、大阪市博物館協会は設立7年目、公益財団法人としては5年目であった。また、大阪市から受託している博物館・美術館4館の管理運営は、大阪城天守閣を含む5館の管理運営をしていた平成22～25年度（4年）、26年度（1年）に続き、平成27～31年度（5年）の指定管理期間の内2年目を終えた。

大阪市の博物館の経営に関しては、国内でも傑出した博物館群を擁するという大阪市の優位性に着目し、これを文化発信、都市魅力戦略の柱として位置づけるべく、これまでの異なる団体による経営形態の一元化を図り、より効率的、効果的な新たな経営形態を目指してきた。

当協会は平成27年度からは、大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館の4館の指定管理者制度における管理代行を行っている。そして、埋蔵文化財発掘調査事業を実施している大阪文化財研究所も含めて各種の事業を施設ごとに、また相互に連携しながら実施しているが、ここでは公益財団法人への移行を認定された際の「協会事業の位置付け」と平成28年度に策定した「協会経営計画」を再確認した上で、協会の「平成28年度の事業」について報告する。

1. 協会事業の位置付け

協会事業を「公益目的事業」「収益事業等」として位置づけ、平成24年4月から公益財団法人として事業を実施している。

（1）公益目的事業

この事業については次の9事業で構成されており、隣接する分野の事業を相互に連携し総合力を発揮することがより効果的であることが位置付けられている。

- ① 埋蔵文化財の発掘調査と保存科学分析事業（受託事業）
- ② 文化財や博物館関係資料の調査研究事業（自主事業）
- ③ 保存科学分析技術の開発と文化財等資料への応用事業（自主事業）
- ④ 文化財等資料を活用した展示・公開事業（自主事業）
- ⑤ 講座等による教育普及や人材育成事業（自主事業）
- ⑥ 体験活動事業（自主事業）
- ⑦ その他活動（自主事業）
- ⑧ 文化財関連施設管理・活用事業（受託事業）
- ⑨ 大阪市立博物館・美術館管理運営事業（指定管理による受託事業）

（2）収益事業等

① 収益事業

施設の一部を売店・食堂等として使用することで、来館者サービスの向上やその収益を公益目的事業に充てることを目的とする事業

② その他の事業（相互扶助等事業）

友の会会員に対して行う講演会等を通じて、友の会活動の推進や会員の美術・東洋陶磁に関する公益目的事業に対する理解を深めることを目的とする事業

2. 協会の経営計画

経営計画は平成28年6月に策定され、「団体のビジョン」「行動指針（計画）」「経営目標」が定められている。

（1）団体のビジョン

- ① 大阪市の博物館・美術館の実績・伝統を継承するとともに、インバウンドなどの環境の変化を見据えながら新たな魅力を創出する。
- ② 都市大阪にふさわしい、国内外からのさまざまな利用者ニーズに応えられる博物館をめざす。
- ③ 大阪市の博物館・美術館の相互連携によって総合力を発揮し、国内外への都市大阪の魅力の発信拠点をめざす。
- ④ 35年をこえる遺跡の考古学的調査を活かした確かな知識と技術にもとづき、文化財の幅広く総合的な調査研究を行い、その成果を広く発信する。

（2）行動指針（計画）

- ① 実績・伝統により蓄積された財産を継承し、収集・保存、調査・研究活動により財産の充実をはかり、さらに社会環境の変化に応じた有効活用をはかる。[ビジョン（1）]
- ② 大都市「大阪」で、集中して立地する特性を活かし、市民の博物館施設利活用を促すとともに、社会資源や産業界との連携をはかることで、まちの活性化と発展に貢献する。[ビジョン（2）（3）]
- ③ あらゆる世代、さまざまな利用者が、多様な学びや活動の場として活用するための支援と多言語化を含めた環境整備に努める。[ビジョン（2）]
- ④ 知識・経験・技術等を共有したり、展示や広報での連携を通じ、多様で質の高い事業を展開する。[ビジョン（3）]
- ⑤ 連携や協働を通じた博物館活動の活性化と、柔軟な発想により、新たな都市魅力の創出をはかる。[ビジョン（3）]
- ⑥ 国内外に向けてさまざまな手段で情報発信し、新たな魅力を伝える。[ビジョン（3）]
- ⑦ 発掘調査成果の迅速な公開に努めるとともに、博物館と連携しつつ、その積極的活用をはかる。[ビジョン（4）]
- ⑧ 安定した経営のため、博物館施設や文化財研究所において寄附金・協賛金など外部資金を含めた収入の確保を図りつつ、経費については増加要素もあるが、様々な削減に努め、効率的な運営を行う。

（3）経営目標

目標1 指定管理4施設全体の常設展入館者数の増加

（目標）5年間で2%増 平成27年度657千人 → 平成32年度670千人

[平成28年度] 775千人

目標2 各館の事業成果や広く国内外の作品を紹介する特別展の充実

(目標) 年間で13本程度を開催

[平成28年度] 14本

目標3 講演会や体験学習等を通じた資料や研究成果の積極的公開・活用

(目標) 年間500回・参加80,000人程度を維持

[平成28年度] 521回・74,906人

目標4 指定管理4施設全体での学校利用の促進

(目標) 年間延べ1,000校以上を維持

[平成28年度] 1,085校

目標5 当協会所管の各館所並びに(公財)大阪科学振興協会・大阪市立大学など関係機関との連携事業の展開

(目標) 年間140件以上を維持

[平成28年度] 139件

【大阪市博物館協会 基本方針】

1. 各館の実績・伝統を継承するとともに、新たな魅力を創出します。
2. 都市大阪にふさわしい、さまざまな来館者に応えられる博物館をめざします。
3. 相互の連携によって総合力を発揮し、都市大阪の魅力の発信拠点をめざします。
4. 点検・評価を行い、ニーズに則した事業の実施と効率的な運営をめざします。

3. 当協会を取り巻く状況

大阪市においては、平成28年12月「大阪市ミュージアムビジョン」を策定され、本年2月、「博物館施設の地方独立行政法人化に向けた基本プラン(案)」を取りまとめ、3月28日開催の大都市会本会議において、地独法人化にかかる予算が可決され、今後の制度設計に当たって、設立団体としての市の役割と責任を十分に踏まえ検討するよう、附帯決議が付されたうえで認められた。

これより大阪市では、基本プランに示されている平成31年4月の地独法人設立に向けた具体的な取り組みと調整が進められることとなるが、当協会としても大阪市の状況を踏まえて地独法人設立に向けた準備を鋭意進め、円滑に移行させるための作業を主体的に進めているところである。

具体的には、市、大阪科学振興協会との法人化に向けた調整会議を定期的に開催し、併せて専門分野ごとにワーキンググループを立ち上げて、分野ごとに課題の整理を始めており、地独法人化に併せて廃止する方針が示されている当協会が担ってきた諸事業の円滑な継承、文化財研究所のあり方、職員の雇用の確保など様々な課題について検討し、大阪市、大阪市教育委員会及び関係先と協議・調整を継続してしていくこととしている。

I 大阪市博物館協会の概況

当協会では、平成 28 年度において、指定管理施設の常設展入館者数の増加など、5 つの経営目標を掲げ、その達成に向けて取り組んできた。

博物館・美術館等の常設展入館者数は、インバウンドの影響により大阪歴史博物館の来館者が大幅に増加したことなどによって、平成 27 年度と同様に目標を大きく上回り、前年度比 117.9% となつた。また、特別展の開催回数は、目標を達成することができたうえ、好評を得た展覧会が多く、入館者数は 720,772 名で前年度（394,720 名）比 182.6% と大幅に伸びた。常設展と特別展、および美術館の地下展を合わせた入館者数は 1,805,147 名で前年度（1,364,766 名）に比して 132.3% と伸長している。教育普及事業については、講演会や体験学習等の実施回数は昨年度並みの実施実績となつたが、参加人数総数については目標を下回る結果となつた。

博物館・美術館等への学校団体利用については、児童・生徒数の自然減に加え、校外学習に充当できる時間の減、観光バス料金の値上げ等により減少傾向が止まらない状況にあつたが、平成 28 年度については昨年度並みの利用を得て、目標を達成することができた。

連携事業では、大阪市立大学との包括連携協定に基づく事業をはじめ、各館・研究所の関係先との日常的な取り組みにより継続的な活動を実施し、ほぼ目標値通りの事業を実施することができた。

平成 28 年度の決算状況については、大阪文化財研究所における文化財調査受託事業が増加したことで収支が好転し、指定管理 4 館も、インバウンドの影響により常設展入場者数が増加したこと、特別展が好評を得て有料入場者数を伸ばしたことなどにより、経常収益が平成 27 年度決算額を上回つた。

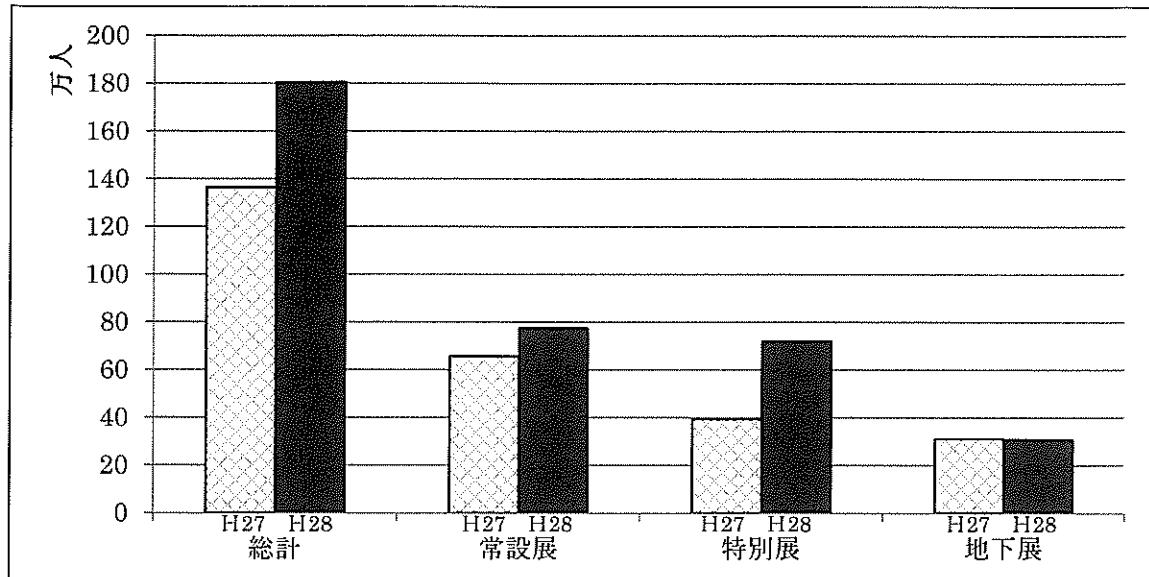
経常費用も、当初見込んでいなかった文化財調査受託事業の増による、工事請負費の増や、指定管理 4 館における特別展展覧会事業費、展示環境の向上にかかる経費の増などにより、平成 27 年度決算額を上回つている。

もっとも、調査受託収益や観覧料収益の大幅な増により、経常収益の増が経常費用の増を上回り、経常収益と経常費用の差引である当期正味財産増減額は、前年度約△6 千 2 百万円から、平成 28 年度は約 1 億 6 千万円と改善された。

各館の入館者数

		大阪歴史博物館	大阪市立 自然史博物館	大阪市立 美術館	大阪市立 東洋陶磁美術館	合計
常設展	27年度	339,200	214,822	39,005	64,156	657,183
	28年度	391,862	244,587	19,773	118,749	774,971
特別展	27年度	60,744	115,205	164,950	53,821	394,720
	28年度	108,771	133,483	361,906	116,612	720,772
地下展	27年度	-	-	312,863	-	312,863
	28年度	-	-	309,404	-	309,404
小計	27年度	399,944	330,027	516,818	117,977	1,364,766
	28年度	500,633	378,070	691,083	235,361	1,805,147

入館者数の年度比較（左・27 年度、右・28 年度）



館蔵品の収集では、寄付による収集が中心となっている。大阪歴史博物館では 2,078 点の寄付を受け、28 年度末館蔵品総数 138,595 点。自然史博物館では 34,854 点の寄付を受け、28 年度末総資料数 167 万 9,487 点。美術館では 106 件の寄付を受け、28 年度末館蔵品総数 8,479 件。東洋陶磁美術館では 22 点の寄付を受け、28 年度末館蔵品総数 6,901 点となった。また、8 月には、大阪歴史博物館の間重富関係資料について重要文化財指定にかかる官報告示がなされた。

平成 28 年度には、指定管理施設へのインバウンドを含めた来館者増加に向けて、文化庁補助金を活用して、多言語化・広報強化をはかった。施設の現状を点検するとともに、ホームページ・施設案内パンフレット等の多言語化に取り組んだ。

平成 29 年度も、引き続き文化庁補助金を活用した多言語化を行うなど、来館者サービスの環境整備に取り組むとともに、大阪文化財研究所の発掘調査受託をより積極的に獲得し、効果的・効率的な経営に努めてまいりたい。

地震に対する取り組みとしては、各館における展示品・収蔵品、観覧者・職員に対する地震被害の低減を目的として「地震に対する減災対策指針」をまとめ、短期の対策を講じながら中長期の計画を検討していくこととした。

II ミュージアム魅力発信事業

協会では、経営計画に基づき、協会各館・研究所が相互に連携した事業、外部の関係機関と連携した事業、協会としての共同広報事業などを「ミュージアム魅力発信事業」として実施し、民間事業者等とも連携を行っている。平成 28 年度は、博物館・美術館ポータルサイトや SNS アカウントの運営、民間事業者とともに取り組んだ広報紙「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」の発行を継続した。同様に、民間事業者との連携で実施した Beacon システムを用いた展示案内の実証実験（東洋陶磁美術館）を行い、今後の新たなサービスのため検証結果を得た。

学校連携・大学連携では、「教員のための博物館の日」、小中学校の博物館利用についての実態調査を継続実施し、市立大学との連携事業としてはシンポジウム「『真田丸』の歴史学」、「生きている化石メタセコイア」記念事業など、時宜に応じた催しを実施した。

また、文化庁補助金を活用し、大阪新美術館建設準備室とも連携して、ポータルサイトや各館ホームページ・パンフレット等の多言語化に取り組んだ。平成 29 年度分においても、大阪市立科学館・大阪観光局を加えて申請を行い、部分採択の結果を得た。

1. 広報・発信事業

平成 27 年度から民間事業者との連携で発行する広報紙「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」は、3 号（8 月・6 万部）・4 号（3 月・4 万部）を発行した。協会が運営する各館・研究所の魅力、楽しみ方や周辺情報などを広く発信し、新たな利用者、博物館・美術館ファンを増やすことを目的に、図書館・区役所等の公共施設、生涯学習施設のほか、ホテル・銀行や大型量販店をはじめとした商業施設等にも設置・配布した。

各館・研究所の広報活動を支援するため 26 年度に開設したポータルサイト「Osaka Museums」については、平成 28 年度文化庁補助金により、多言語による大阪ミュージアムズ各館の紹介ページを増築した。一覧性を高めて外国語サイトにもリンクしやすい環境を整備して 2 月より公開し、繁体字や英語ページに多くのアクセスがみられた。また、同ブランドの SNS（Facebook・Twitter）による情報発信を行った。

ホームページの平成 28 年度のアクセス数は月平均 12,165 件となり、27 年度の 11,111 件に比して増加し、総アクセス数も 145,980 件を数えた。Twitter フォロワー数は 2,046 で、27 年度の約 2 倍となり、ツイートインプレッション（ツイッターを見た人）の数は 467,071、Facebook のいいね数は 768 であった。堅調にアクセス数は伸びているが、いまだ絶対数としては低いレベルにあり、今後もアクセス数増の取り組みとして、効果的な記事投稿と、関係施設等とのリンク拡充や SNS の支持者の裾野を広げる活動に取り組んでいく。

26 年度に作成した総合案内パンフレット「Osaka Museums Guide」の外国語版として、4 言語（英語・中国語〔簡・繁〕・韓国語）で発行した。外国人旅行者にとって来館時に有用な情報として、Free-WiFi、音声ガイドの有無、クレジットカード利用の可否を新たに付記し、観光案内所・ホテル等へ設置・配布した。

このパンフレット作成の前提として、外国人観光客動向調査を大阪歴史博物館（11～12月）、東洋陶磁美術館（1～2月）において実施した。対面アンケート形式で外国人観光客の大坂での滞在日数、来訪施設等の動向や博物館・美術館利用についての満足度・要望等を調査した。傾向として、大阪での滞在日数は国籍別にみると、中国や欧米は大阪での宿泊が50%以下と「周遊型」旅行者が多く、韓国や台湾、香港は大阪での宿泊が占める割合が高い「滞在型」旅行者が多い傾向にあり、大阪観光局が示す全体的な傾向に一致した。来訪施設等の動向では、大阪歴史博物館への来館者は大阪城と道頓堀、寺社仏閣への来訪者が多く、全体的な傾向と一致したが、東洋陶磁美術館ではこれらに加え他の博物館・美術館への来館者が目立つ傾向にあった。大阪歴史博物館と東洋陶磁美術館の展示に対する満足度は「とてもよい」「よい」の回答が97%以上と非常に高くあり、要望としては「母国語の表記や音声ガイド、パンフレットを希望する声」が多くあった。その他、両館についての情報入手をwebサイトからが3分の1を上回る割合であったことなど、今後の広報等へ生かしていくべき貴重な結果を得た。

その他の共同広報の一環として、関経連主導の外国人旅行者向け統一交通パス「Kansai One Pass」や、大阪市交通局の夏休み事業である「おでかけキッズサマーパス」に協力した。

2. 文化庁補助金による多言語化の取り組み

平成28年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」補助金を活用し、大阪歴史博物館を中心館として、協会各館・研究所および大阪新美術館建設準備室の多言語化事業に取り組んだ。補助金総額は、12,355,342円であった。

パンフレット作成では、大阪歴史博物館では、外国語版施設案内パンフレットを既存の英語・中国語（簡・繁）・韓国語に加え、フランス語、スペイン語、タイ語、アラビア語版を作成して言語数の拡大を実施した。自然史博物館では施設案内パンフレット（英・中（簡・繁）・韓）を作成、大阪文化財研究所でも難波宮の遺跡案内パンフレットの外国語版を作成し、国際発信力の向上を目指した。

ホームページでは、前述の通り、大阪ミュージアムズのポータルサイトに多言語ページを増築したほか、自然史博物館、美術館でホームページの多言語化（作品解説を含む）、スマートフォン対応を実施した。大阪歴史博物館においては、翻訳データを作成し、ホームページの多言語化を充実させた。

展示等の解説としては、大阪歴史博物館では展示パネルやボランティア活動ツールの翻訳データを作成し、東洋陶磁美術館では60件の作品解説を含む音声ガイド用外国語音声データを作成した。

なお、事業にあたっては、先行事例調査（横浜美術館・国学院大学博物館・東京都江戸東京博物館）を実施し、加えて外国人アドバイザーによる協会4館の施設点検を行い、日本人では気づかない視点からの指摘を受け、今後への大きな指針を得た。これらの事業の総括として、シンポジウム「ミュージアムに求められる多言語化・国際発信」（1月27日・大阪歴史博物館）を開催した。

3. 民間事業者との連携、民間ノウハウの活用

民間事業者との連携については、広報紙「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」の発行を行った。東洋陶磁美術館では Beacon システムを用いた展示案内の実証実験を民間事業者とともに 1 年間実施し、現状の館内設備等ではスムーズに使用できないことが分かった。美術館では、障がい者特別鑑賞会を三菱商事株式会社と連携して、特別展「デトロイト美術館展」開催時の 9 月 10 日に行なった。

4. 教育普及に関する連携

(1) 小・中学校との連携

小中学校との連携については、平成 25 年度から継続して「授業に役立つミュージアム活用ガイド」を活用し、主に市内の校園長会や教育研究会との連携を深め、積極的に学校団体利用の促進を図った。校外学習の決定時期である 3 月に合わせて、28 年度末にも改訂版を増刷し、大阪府内の学校への情報提供の取り組みを進めた。

平成 28 年度の学校団体利用総数は、平成 26・27 年度と比較して、増加した。大阪市内の小中学校については、中学校を中心に増加し、また、減少傾向にあった市外についても、小学校は減少したが、中学校が増加して合計 593 校となり、平成 26 年度とほぼ同数となつた。

平成 28 年度は、教育委員会や教育センターとの連携事業として、「教員のための博物館の日 2016 in 大阪市立自然史博物館」(8 月 3 日) を大阪市立自然史博物館と共に実施した。各館・所の学校向け事業を紹介するほか、大阪歴史博物館の学芸員による自然史博物館での解説ツアー、大阪市立科学館・天王寺動物園の学芸員によるプログラムの実施など、博物館の連携を生かして、多様なプログラムを組み込んだ。大阪市の博物館・美術館の学校との連携を進めるためには、継続性が必要であることから、平成 29 年度の「教員のための博物館の日」は大阪市立自然史博物館のほか、大阪歴史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館でも開催の予定である。

市立美術館と連携した取り組みとしては、特別展「壺中之展」の開催期間中に小学校鑑賞学習を実施したほか、特別展「デトロイト美術館展」では、子ども向けのワークシート「鑑賞ノート」を企画し、作成のサポートをした。

各館においては、中学・高校の職場体験・職業講話の受け入れも実施しており、大阪歴史博物館では 5 校 11 人、自然史博物館では大阪府内の 11 校 15 人を受け入れた。また大阪歴史博物館では、大阪市教育センターとの共催で「大阪市教員研修」(30 人) を実施している。

(2) 高等学校・大学との連携

大学との連携については、引き続き大阪市立大学との包括連携協定に基づいて、学芸員養成課程の博物館学 3 講座（前期：博物館経営論・博物館資料保存論、後期：博物館展示論）への学芸員の出講をはじめ、博学連携講座「大坂（石山）本願寺はどこまでわかったか」(市立大学文化交流センター、10 月～11 月、4 回)、ミュージアム連続講座「大阪市立美術館と天王寺—美の殿堂の 80 年と地域の歴史—」(難波市民学習センター、11 月、3 回)、

を共催し、学芸員の派遣、大学教員の招聘をおこなった。

包括連携協定の枠組みで共同企画したシンポジウムとして、NHK大河ドラマにちなんだ「『真田丸』の歴史学」（大阪歴史博物館、12月17日、参加216名）を開催し、タイムリーな企画として大きな反響があった。また、自然史博物館と市立大学理学部附属植物園が中心となり、「生きている化石『メタセコイア』—化石発見75周年・生存発見70周年記念事業—」（10～11月）として、記念講演会・特別陳列・オープンセミナー・現地化石見学会・植物観察会を開催した。

キャンパスメンバーズ制度については、（公財）大阪科学振興協会、大阪城パークマネジメント株式会社とともに3法人で運営する体制となって2年が経過した。25年度から継続する4校の内1校（高校1校）が退会となったものの、1月から新たな参加校（大学1校）が加わった。課題である会員校の拡大のため、2月に年会費の改定（適用は29年度から）を実施し、今後、新規参加校の開拓の取り組みを強める。いま一つの課題である会員校の利用率アップへの取り組みとして、協会ホームページにおいて会員校向けに展覧会情報等の掲載を開始した。

また、各館においては、大学の学芸員養成課程等の受け入れを実施しており、大阪歴史博物館では博物館実習に12大学41人、見学実習に7大学210人、インターンシップ1大学1名、自然史博物館では博物館実習23大学のべ39名、美術館では博物館実習に21大学45名、インターン研修に1大学院1名（陶磁器）、東洋陶磁美術館では見学実習3大学138名を受け入れた。

（3）博物館・その他機関との連携

ミュージアム連続講座2016「大阪市立美術館と天王寺—美の殿堂の80年と地域の歴史—」（11月4日・11日・18日）を大阪市立難波市民学習センターで開催した。27年度に引き続き、大阪市立大学・大阪教育文化振興財団と連携して3者での共催事業とした。大阪市立美術館の特別陳列「壺中の展—美術館的小宇宙」にちなみ、大阪市立美術館・大阪文化財研究所・大阪歴史博物館および大阪市立大学から6名の講師が、美術館と天王寺の歴史とコレクションについて多様な視点から紹介して好評を得た。

大阪歴史博物館では、関西大学と共に特集展示「関西大学創立130周年記念　関西大学蔵 本山コレクションの精華」（10月5日～11月14日）を開催したほか、同志社女子大学と共に講座「教育のまち 京都と大阪」、NPO法人OSAKA ゆめネットとの共催による「難波宮フェスタ2016」などの連携事業を実施した。

自然史博物館では、特別展「氷河時代」のミニ展示を、市立図書館と連携し、市立中央図書館をはじめとする市内各図書館7カ所（5月1日～10月19日）を巡回開催し、府立中央図書館（4月19日～5月9日）でも実施した。市立中央図書館では、6月11日に学芸員による「出張！自然史博物館 おおさかにいた ぞうのはなし」も実施した。また「認定NPO大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めた。

美術館では、うえまちコンサート「美術館で日本叙事歌を」をNPO法人まち・すまいづくりと共に10月1日に実施した。東洋陶磁美術館では、大阪市中央公会堂・大阪府立中之島図書館・国立国際美術館、大阪国際会議場等と連携して、水都大阪・中之島まつ

りなど中之島地域の活性化イベントに協力した。

大阪文化財研究所では、NPO やボランティアガイドなど市民団体と協働して「難波宮フェスタ 2016」、「なにわの宮リレーウォーク」（第 6 弾）を開催した。また、平野区役所・同区の市民団体とで実行委員会を組織し第 14 回「古代市」を実施した。

東洋陶磁美術館では、ナレッジキャピタルと連携し、「ナレッジキャピタル超学校 大阪市立東洋陶磁美術館～東洋陶磁の魅力」、「東洋陶磁の魅力Ⅱ」を開催した。

平成 27・28 年度において、大阪商工会議所・大阪市・大阪観光局・大阪府などが構成団体となる大河ドラマ「真田丸」大阪推進協議会が組織され、協会としても、都市大阪の魅力を発信する機会として積極的に参画した。28 年度は、展観事業として大阪歴史博物館で NHK 大河ドラマ特別展「真田丸」（9 月 17 日～11 月 6 日）を開催し、大阪文化財研究はなにわの宮リレーウォーク（第 6 弾）「真田丸と大坂の陣の戦跡を歩く」（9 月 25 日・10 月 23 日・11 月 20 日）を共催し参加した。

5. 点検評価

平成 26 年度に、平成 24 年度の総合評価後の各館・研究所における措置状況を報告し、改めて外部評価委員より各館・研究所における現状と今後について多岐にわたる指摘や助言を受けた。平成 28 年度は、平成 26 年度評価の指摘事項に対する平成 26～28 年度 3 年の措置状況をまとめる準備作業に着手し、大阪市が策定した「ミュージアムビジョン」や「博物館施設の地方独立行政法人化に向けた基本プラン（案）」を視野に入れながら、平成 29 年度に外部評価を実施するための準備作業を進めた。

6. 外部資金の獲得

平成 28 年度の採択に続き、平成 29 年度においても文化庁補助金「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」について、大阪歴史博物館を中心館として、協会が運営する各館に加え、大阪新美術館建設準備室・大阪市立科学館・大阪観光局・大阪国際交流センターを加えた実行委員会体制で申請を行った。申請内容は、引き続き「国際発信と多言語化事業」として、博物館・美術館紹介動画の制作や、各館のホームページ・パンフレット・展示解説等についての翻訳・改修等を実施する内容とした（申請額 33,990 千円）。3 月 31 日付けで文化庁より「部分採択」（29,686 千円）の審査結果を得たため、平成 29 年度に採択のための再申請を行い、多言語化の具体的な取り組みをさらに推進していく。

III 大阪文化財研究所事業

平成28年度のおもな発掘調査として、（独）国立病院機構大阪医療センター敷地内の難波宮跡・大坂城跡の調査があり、現地公開を開催した。報告書では『難波宮址の研究 第二十一』の編集を行った（刊行は平成29年度）。文化財の保存科学の研究も進み、タイから技術指導招聘を受けるなど海外の評価を得た。これらの成果を大阪歴史博物館や市民団体との連携による教育普及事業で活用し、大阪の歴史と文化財の周知を図った。

一方で平成26・27年度に大きく減少した大阪市域における発掘調査の受託は、本年度に回復傾向となった。年度途中からは近隣他都市へ出向した学芸員を戻して受託事業の確保を図るとともに、この間の職員・人材派遣職員減などによる人件費・委託費や、事務所縮小などによる管理費をはじめとする経費削減効果により、収支状況は大きく改善した。

また、文化庁・岩手県の要請に応じて東日本大震災復興支援のため学芸員1名が1年間（公財）岩手県文化振興事業団に出向したほか、他地域からの応援要請にも応えて数箇月から1年間にわたり複数の学芸員が出向した。

1. 埋蔵文化財の調査及び報告書作成など

(1) 文化財調査受託事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成28年度の発掘調査は契約件数87〔38〕件、調査面積16,022.5〔3,252〕m²、受託額328,803,630〔68,994,191〕円（税抜）であった。前年比で受託件数は2.3倍、面積は5倍弱、金額は4.8倍近くに増加した。発掘調査に報告書作成の3,454,000〔18,704,000〕円を合わせた金額は3億3,200万円強〔8,770万円弱〕で、前年比で約3.8倍に増大した。委託元の内訳は、大阪市22.26〔64.34〕%、国関係37.71〔0.66〕%、大阪府0〔0〕%、民間40.03〔35.00〕%であった。

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業			合計	
	件数	面積	受託額（税抜）		件数	受託額（税抜）			
国関係	1	2,954	125,296,000	38.11%	-	-	0.00%	125,296,000	37.71%
大阪府	-	-	-	0.00%	-	-	0.00%	-	0.00%
大阪市	4	1,371.5	70,498,630	21.44%	1	3,454,000	100.00%	73,952,630	22.26%
民間	82	11,697	133,009,000	40.45%	-	-	0.00%	133,009,000	40.03%
合計	87	16,022.5	328,803,630	100.00%	1	3,454,000	100.00%	332,257,630	100.00%

※民間事業2件（SQ17-1・TK17-1）は調査着手がH29年度のため、面積・受託額をH29年度事業報告に記載予定

受託額の増大には、国関係である（独）国立病院機構の事業1件と大阪市4件（市営住宅建替え事業2件含む）の影響が大きい。民間事業でも、大規模開発などに対応した市教育委員会による試掘結果を受けた発掘調査を22件行い、新発見の遺跡として市域における遺跡範囲の拡大にもつながった。また、淀川左岸水防事業組合の庁舎新築事業により、

枚方市教育委員会の指導のもとで枚方宿遺跡（枚方市）を調査し報告書を刊行した。以上の結果、極端に事業量が減少する前年の平成25年度〔6億円強〕に比べ額は小さいが、収支状況は大きく改善された。

一方で、報告書作成が未契約のままである市営住宅建替えに伴う発掘調査22件については事業がなかった。平成27年度（『加美遺跡発掘調査報告VII』）と同様に、今後も報告書を刊行して成果を公表することが必要である。

おもな調査成果には次のものがある。

古代以前では、平野区喜連西遺跡（KR16-1）で弥生時代前期の遺物や中・後期の遺構、古墳時代初頭の方形周溝墓2基などを発見した。大型の墓には2基の埋葬施設が確認された。大阪医療センター敷地内（NW15-1）では奈良時代の官衙建物群が見つかり、後期難波宮の曹司として初めての発見で、現地説明会で公開した（平成28年12月3日：720人）。中央区大坂城下町跡（0J16-1）では瓦、硯・墨書き土器を含む8・9世紀の遺構・遺物がまとまって見つかり、公的施設の存在が窺える。

中世では、住吉区住吉行宮跡（SN16-1）で豊臣期以前の大型の堀の一部が見つかり津守氏居館に係るものと推測された。

近世では、中央区大坂城跡（OS16-3）で豊臣期大坂城の惣構南堀の北辺を発見し、惣構の復元研究の重要な定点となった。また中央区大坂城下町跡（0J16-3）で豊臣後期～徳川期の屋敷地の変遷を明らかにし、中央区南船場2丁目所在遺跡D地点（0J15-4）でも豊臣後期～徳川期の町屋の変遷を追い、豊富な輸入陶磁器類や海水魚を主体とした多量の動物遺体、市内初となるネコの埋葬例など多くの情報を得た。中央区上本町遺跡（UH16-2）では、徳川期後半の鋳型（半鐘・獸脚など）が大量に発見され、付近に鋳物工房が推測された。隣接する瓦屋町遺跡からも同様の鋳型が出土しており、町屋の縁辺地域の利用状況が窺える。

報告書は『難波宮址の研究 二十一』の編集作業を行った。難波宮東方官衙地域の史跡整備調査を対象とし、平成29年度に刊行を予定している。

② 保存処理・分析事業

今年度の受託件数・受託額は昨年度よりも減少した。大阪府下では藤井寺市の1件、奈良県下では田原本町の1件、和歌山県下では和歌山市の3件、そのほか島根県教育庁・鳥取県教育文化財団・松江市・今治市・土佐山内記念財団・（公財）京都府埋蔵文化財センター・（公財）岩手県文化振興事業団など合計14組織24〔41〕件の事業を受託した。以上の保存処理事業の受託額は約1,595万〔約2,830万〕円である。

このほか、従来の事業報告に合わせて上記（1）に含めたが、大阪市から大坂城跡本丸内の「豊臣期遺構保存状況確認調査」1件（123万円）を受託した。

③ 文化財関連施設の管理事業

大阪市立埋蔵文化財収蔵倉庫（平野区）・東淀川調査事務所（東淀川区）・西淀川収蔵倉庫（西淀川区）・鶴浜収蔵庫（大正区）で恒常的な出土遺物の管理を行い、1,060箱の遺物収納コンテナの移動や、整理作業による収蔵遺物の系統的な管理を行った。

2. 保存科学技術の開発と文化財など実資料への適用

大阪市の事業として、大坂城豊臣石垣公開事業に伴う地下の環境調査を行った。地表面数箇所と地下7mにある豊臣期遺構面の地温・含水率、降水量などを測定することにより、石垣裏からの通水量の変化を検討するための調査で、平成25年度から本年度末まで継続した。この他、市内遺跡の発掘調査に係って大坂城下町跡（OJ16-1）の徳川期水牛の角や、喜連西遺跡（KR16-1）の古墳時代初頭木棺墓の取上げなどを行った。

科学研究費助成を得て研究を進めているトレハロースを用いた木製文化財の保存技術について、日本文化財科学会やWet Organic Archaeological Materials (ICOM-CC、フィレンツェ)で学会発表、モンゴル科学アカデミー考古学研究所や大阪文化財研究所で研修会を開催した。また、自然エネルギーを使って木製品の保存処理を行うための太陽熱集熱含浸処理装置を設計・製作し、その初号機を長崎県松浦市立鷹島埋蔵文化財センターに設置した。

このような研究成果が評価され、2度（平成28年6月・29年3月）にわたってタイ王国文化省からの招聘を受け、沈没船の保存処理に関する技術指導を行った。

3. 文化財に関する研究

科学研究費助成事業の基盤研究（B）・（C）各1件、基盤研究（A）の研究分担者1件を継続したほか、新規に基盤研究（C）2件、基盤研究（B）の研究分担者1件が採択された（直接経費交付額：1,000万円）。また、大阪市立大学との包括連携協定に基づき、難波宮の共同研究を継続した。研究成果は、講演会の開催（平成29年2月4日：「難波宮前の上町台地の都市化—とくに物資（木材等）の需給から」など）や『研究紀要』第18号（全国約300機関に配布）の刊行などを行って公開に努めた。

また、海外の考古学情報を取り入れて紹介するため、大阪大学と共にダーラム大学（イギリス）クリス・スカー教授による講演会「西ヨーロッパ新石器時代の記念物遺跡—その保存と公開」（平成28年9月4日）を開催した。

4. 教育・普及事業

本年度は学芸員の退職減（正職員2名・再雇用1名・嘱託/契約職員3名）に加えて上半期は出向学芸員が多く（最大5名）、下半期は発掘調査件数が増大したため必要な人員を充てることができなかったが、従来の教育・普及事業の継続に可能な限り務めた。

（1）展示などをはじめとする資料活用

大阪歴史博物館と共に特別企画展「都市大阪の起源をさぐる 難波宮前夜の王権と都市」（7月16日～8月29日）、特集展示「新発見！なにわの考古学2016」（11月16日～12月26日）を開催した。「なにわの考古学2016」展では、平成27年度の発掘成果から弥生時代末期の土器群（中央区日本橋遺跡）、古墳時代の土器群（北区長柄西遺跡B地点）、室町時代の瓦（天王寺区茶臼山遺跡）や硯・笄（淀川区宮原遺跡）、江戸時代の陶磁器（北区天神橋遺跡）、明治時代の大坂鎮台関連遺物（中央区大坂城跡）などの主要な成果に加えて、これまでの豊臣期大坂城の調査成果をまとめた展示を行った。

このほか、平野区「古代市」に合わせて「古代のクラフト展」（4月28日～5月5日）を大阪市立クラフトパークで開催して長原遺跡の古墳時代朝鮮半島系資料を展示した。また、市内各地の公共・民間施設に設置された「街角ミュージアム」では35箇所2,097点の出土品を通年で公開した。

さらに、全国の博物館・美術館などの申請に対応した出土品は11 [33] 件281 [543] 点、出版目的などで提供した写真・図面は72 [82] 件405 [201] 点、調査研究への対応は12 [13] 件1,192点であった。

(2) 講座などによる教育普及や人材育成

発掘現場の現地説明会（難波宮跡1回1日間、720人）や、大阪歴史博物館と共に「大阪の歴史を掘る講演会（40人）」（「なにわの考古学2016」展関連行事）などを開催した。

「平野区歴史講座（大阪市コミュニティ協会）」、「平野住民大学講座（平野区画整理記念会館）」などの他団体が主催する講座に係り、企画や講師派遣を行った。また、考古学や文化財の研修・教育課程の講師として調査機関、大学などに学芸員を派遣した。

(3) 地域と連携したイベントなどの共催・出張展示

本年度もNPOやボランティアガイドなど市民団体と協働して「難波宮フェスタ2016」で講演会を、平成23年度から継続している「なにわの宮リレーウォーク」（第6弾）で文化財探訪イベントを行った。また、平野区役所および同区の市民団体とともに実行委員会を組織する第14回「古代市」でワークショップや展示解説を、中央区民祭では難波宮調査事務所の展示室公開と展示解説を行った。

(4) 体験活動事業

平成28年度も史跡整備のための難波宮跡の発掘調査が実施されなかったため、体験発掘は行っていない。史跡難波宮跡や難波宮調査事務所の資料展示室見学で29件164人に対応した。そのうち学校を対象としたものは府下高校生徒など6件131人であった。

(5) 情報発信

発掘調査や出土品に係る新聞報道は1回で、文化財情報誌『葦火』は全頁をカラーにして4号（181～184号）各700部を刊行した。定期購読者は113 [108] 人であった。ホームページの接続は26,766 [29,977] 件（累計728,657件）、また、文化財見学サイト「なにわまナビガイド」は4,845 [3,470] 人の利用者であった。

このほか海外からの来阪者に難波宮の歴史を紹介すべく、「大阪市博物館施設の国際発信強化実行委員会」に参加して、文化庁補助金事業による外国語版遺跡案内パンフレット『難波宮 都市に埋もれた幻の古代宮殿』の4箇国語版（英語・ハングル・中簡文・中繁文）を制作し、大阪歴史博物館などの協力を得て配布している。

(6) 関連資料の収集・管理

交換・贈呈による発掘調査報告書・普及図書の受け入れ作業を進め、558 [400] 冊を追加して登録図書は88,682 [88,124] 冊となった。

(7) 他団体との連携

9年目となった全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロック（13団体）による「関西考古学の日2016」に参画し、講演会「本願寺と考古学の世界」（会場：大阪歴史博物館）、

リーフレットによる共同広報、スタンプラリーなどを実施して各団体の遺跡情報や教育普及事業の周知に努めた。

5. 博物館・美術館との連携

発掘調査の出土品と研究成果を活用し、特に大阪歴史博物館との特別企画展・特集展示や関連行事の開催で連携した。そのほか「ミュージアム連続講座2016」などの事業でも連携した。

6. 東日本大震災復興支援など学芸員出向

岩手県の要請に応え、東日本大震災復興支援の埋蔵文化財調査のため担当者1名を1年間（公財）岩手県文化振興事業団へ派遣し、地域の貴重な文化財の保存と活用に寄与した（平成29年7月に文化庁長官の表彰予定）。また（公財）かながわ考古学財団（27年4月～29年3月：1名）、（公財）八尾市文化財調査研究会（27年12月～28年10月中旬：1名）、（公財）京都市埋蔵文化財研究所（28年5月～28年9月：1名）、（公財）枚方市文化財研究調査会（28年1月～28年6月：1名）の要請に応え、発掘・整理作業の担当者として学芸員が出向した。なお29年度は、上記の岩手県へ1名が継続して派遣されている。

IV 大阪歴史博物館管理運営事業

平成 28 年度は当館館蔵品「間重富関係資料」653 点が国の重要文化財指定を受けたほか、折からの戦国時代・刀剣ブームに真田丸人気が乗じるなかで、市民の期待に応えるべく、幅広く大阪の歴史・文化にアプローチする展示・普及活動に取り組んだ。

インバウンドの増加もあって、展示観覧者・利用者は昨年度比 23.5% 増の 530,352 名 [429,378 名] (以下、〔 〕は昨年度) に達した。内、常設展示入館者全体に占める外国人の割合は 31.5% [28.7%]、有料入館者における割合は 43.8% [40.6%] と着実に増加していることから、文化庁の多言語化による国際発信の補助金を受け、インバウンド向けサービスの充実に努めた。

1. 資料の収集、保管事業

平成 28 年度は寄贈資料に関しては、資料収集方針にもとづき、「印判手の皿」「アジアと日本の帆」「文楽人形彫見本」など、歴史資料 344 点、美術資料 1,183 点、民俗資料 292 点、芸能資料 259 点、合計 2,078 点 [4,988 点] を整理・燻蒸し、収藏した。この結果、当館で保管する館蔵品は 138,595 点 [136,517 点] となった。また新たな寄託資料は 178 点 (総点数 17,632) であった。このほか館蔵資料 34 点に修復や保存処理を施した。

2. 展示事業

(1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、季節や時期、話題性を考慮して館蔵品・寄託品を活用した実物資料の展示更新に積極的に取り組み、年間 41 回の展示替えを実施した。特に古代フロアでは前期難波宮「朱雀門」の焼けた柱穴の平面はぎ取りを追加設置したほか、近世フロアでは重要文化財指定の速報展として間重富関係資料を展示し、さらに近現代フロアでは全国 7 カ所で開催された「村野藤吾建築ネットワーク 建築ガイドツアー＆展覧会 2016 年」に連携した展示「村野藤吾と心斎橋プランタン」を実施した。

インバウンドの増加という状況も重なり、本年度の常設展の入場者は前年度比 16.5% 増の 336,736 人 [289,061 人] となった。展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に実施し、1,387 人 [1,415 人] の参加を得た。

(2) 特集展示

特集展示室では、大阪市内の最新の発掘成果を紹介した「新発見！なにわの考古学 2016」や、「平成 24・25・26 年度大阪市の新指定文化財」といった定番開催の企画のほか、関西大学と連携した「関西大学創立 130 周年記念 関西大学蔵 本山コレクションの精華」、日頃展示の機会が少ない館蔵品を公開した「蔵出し名品展 2016」、寄託品・館蔵品を活用した「郷土建築へのまなざしと日本建築協会」、「名刀の面影一刀絵図と日本刀の美」、「近代大阪と名望家」

のあわせて 7 本の特集展示を開催し、常設展示とは違う角度から大阪の歴史・文化の発信に努めた。

(3) 特別展示・特別企画展

平成 28 年度は、特別展として学芸員の自主企画 1 本、巡回展 1 本を開催し、特別企画展として自主企画の展示 2 本を開催した。

◎開館 15 周年記念特別展「近代大阪職人（アルチザン）図鑑—ものづくりのものがたり—」

（平成 28 年 4 月 29 日～6 月 20 日 開催日数 46 日間）

これまでの当館の活動で見いだされた初公開作品を含む「忘れられた大阪の工芸」約 170 件の展示を通じ、幅広いものづくりの見地から大阪の職人を再評価した。図録を一般書籍として作成し、書店ルートでの販売をおこなった。

◎特別企画展「都市大阪の起源をさぐる 難波宮前夜の王権と都市」

（平成 28 年 7 月 16 日～8 月 29 日 開催日数 39 日間）

難波宮に先立つ 6 世紀～7 世紀前葉に、政治・外交の拠点が置かれた当時の難波の中心地、上町台地北部の状況を、約 200 点の考古資料と写真パネル等で紹介した。

◎2016 年 NHK 大河ドラマ特別展「真田丸」

（平成 28 年 9 月 17 日～11 月 6 日 開催日数 44 日間 巡回展）

大河ドラマの主人公・真田信繁（幸村）にスポットをあて、真田家の動向とからめてその生涯を紹介し、新発見・展示初公開の真田丸図をはじめ、信繁ゆかりの品や歴史資料など 177 点を公開し、関連イベントとともに多くの関心を集めた。

◎特別企画展「コレクションの愉しみ—印判手の皿とアジアの扇—」

（平成 28 年 12 月 7 日～平成 29 年 2 月 13 日 開催日数 53 日間）

大阪ゆかりのコレクターが精力的に収集した 2 つのコレクション（湯浅夫妻印判手コレクション 約 1,000 点、木村薰扇コレクション 約 300 点）の展示を通じて、収集の愉しみとその学術的背景を提示した。

平成 28 年度特別展の観覧者は合計 108,771 人（60,744 人）で、昨年度比で約 79% 増となった。

3. 調査・研究事業

難波宮と大阪学の研究を 2 本柱とし、「前期難波宮の官衙遺構についての基礎的研究」、「鴻池家旧蔵名物裂についての研究」、「花月菴（田中家）史料の調査・研究」、「中村順平のスケッチブックと図面類の画題・作画時期解明に関する研究」、「近世都市大坂についての基礎的研究」の 5 課題の共同研究を実施した。また基礎研究としては、「羽間文庫の古典籍の底本に関する調査研究」、「大阪と江戸・東京との都市比較史研究」の 2 課題を実施した。研究成果については「研究紀要」で発表するとともに、「なにわ歴博講座」などをとおして市民に還元した。また「近世都市大坂についての基礎的研究」の成果を「共同研究報告書 11」として刊行した。

外部資金による研究では、科学研究費補助金 676 万円（610 万円）を獲得し、基盤研究（B）1 本、基盤研究（C）3 本、挑戦的萌芽研究 3 本を行った。

4. 教育・普及事業、学習支援

教育普及事業は、市民の歴史学習を支援するためのものとして、学芸員による「なにわ歴博講座」のほか、近世大坂を題材とした古文書講座、7世紀の史料を読む漢文講座、渡来人をテーマにした29年度特別展のプレ連続講座、館長講座「館長と学ぼう 新しい大阪の歴史」、「なにわ考古学散歩 地形から見た大坂の陣の攻防」など多彩なメニューを実施し、時宜を得た話題や最新の研究状況を取りあげることで市民の学習意欲に応えた。また各特別展や特集展示においても、関連の内容でシンポジウム・トークイベント・講演会・展示解説・伝統芸能イベントなど多くの行事やイベントを開催した。これらの事業は合計95回〔94回〕を実施し、総計8,770人〔7,816人〕の参加者があった。

小・中学生を対象とした「わくわく子ども教室」では、常設展8階で毎月第2土曜におこなった「和同開珎の拓本でしおりをつくろう」に年間380人〔324人〕の参加者があり、4日間開催した「考古学者になってみよう」には17人〔17人〕の参加があった。季節に合わせた企画である夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には1日間で64人〔85人〕、正月の「凧づくりと凧あげ」には22人〔20人〕の参加者を得た。毎月2回、1階のエントランスでおこなう「手作りおもちゃで遊ぼう」はおもちゃ作りサポーターによる協力のもと23回実施し、1,691人〔1,666人〕の参加者があった。また、今年度で2回目となった夏休みクラフト教室「近代建築ダンボールクラフト体験」には2日間で25人〔36人〕が参加した。

ボランティア事業は、市民参加型博物館をめざす事業の一環として開館時から導入しているもので、今年度は215人が登録し、活動は、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・江戸時代の両替商体験・明治の双六遊びなど6種のハンズオン、8階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施した。さらに5月と11月の連休に開催した「iPadで楽しむ難波宮遺跡探訪」「石組水路の一般公開」への協力もおこなった。ボランティアの活動は休館日と研修日を除き年間307日で、延べ4,807人〔5,271人〕が活動した。なお、ボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的に、6月から3月にかけて研修会、特別展関連の見学会、懇談会などを年間10回実施した。また、28年度活動のボランティアの任期は平成29年3月末までであったため、次年度以降の継続意思を確認し、197人を29年度の登録者とした。

学習支援関連では、司書・学芸員が常駐する2階の学習情報センター「なにわ歴史塾」で、自由に閲覧できる映像ソフト約100本、図書約6,000冊、「昔の大阪」写真ライブラリー画像約7,000点を中心に、館内外から検索できる書庫内図書約15万冊も活用しながら、大阪の歴史や文化に関する市民の学習相談に応じた。さらに季節・時宜に応じた特集図書コーナーを年間6回設置・配架し、図書利用の推進に取り組んだ。

また、区役所や生涯学習施設等からの講師依頼については、可能な限り当館を会場としながらその要請に応えた。

5. 学校・市民等との連携

学校連携としては、教員研修、中学生・高校生等の職場体験・職業講話、小学校高学年の考古学体験のほか、大学生からの博物館実習およびインターンシップの受入れを行った。

教員等の研修では、大阪市教育センターとの共催で、「大阪市教員研修」(30人)を実施した。中・高校生等の職場体験・職業講話は、14校105人〔8校59人〕を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。また、大阪文化財研究所と連携して「考古学体験教室」を開催し、11月に市内の小学校12校、693人の児童を受け入れた。大学生の博物館実習は8月後半から9月初めに延べ10日間で12大学41人〔11大学43人〕を、博物館見学実習については210人〔256人〕を受け入れた。また、今年度初めて博士号取得者1人を4ヵ月間インターンシップとして受け入れた。なお小中学校による団体利用は、小学校398校〔417校〕、中学校176校〔135校〕、そのうち大阪市立の小学校215校〔208校〕、中学校59校〔52校〕である。中学校は全般的に増加したものの、市外の小学校については減少した。

市民や他団体との連携では、NPO法人OSAKAゆめネットとの共催で「難波宮フェスタ2016」を開催したほか、大阪周辺の大学院生が運営する歴史学入門講座実行委員会との共催で「第32回歴史学入門講座」、都市史学会(大阪大会実行委員会)との共催で2016年度大阪大会「社会的結合と都市空間」を開催した。

6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、館利用者の増を目的として積極的に取り組んだ。館の存在の周知を徹底する目的から、地下鉄車内における案内放送を年通で実施するとともに、英文年間行事予定表の作成と英語による特別展概要・主要作品紹介をホームページに掲載することで、外国人向けの情報提供をおこなった。インターネット関係では、ホームページに展示・普及事業にかかる案内をすべて掲載し、年間で857,867件〔367,262件〕、1日平均2,350件のアクセスがあり、平成27年度比約233.6%と前年度を大きく上回った。また「携帯サイト」の随時更新、ツイッター・「なにわ歴史塾ブログ」による新着情報の発信を積極的に実施した。ツイッターは平成28年度末でフォロワー数が2,982、年間ツイート数は1,003件であった。なにわ歴博カレンダー(4回各2万部)や行事ごとの案内チラシなどの紙媒体の発行も継続し、多様な層への情報浸透に引き続き取り組んだ。

7. 来館者サービスの向上

館内のレストランとの連携をはかり特別展ごとに観覧者への入館割引または飲食割引のサービスを実施している。大阪城天守閣とのセット入場券(常設のみ)は今年で7年目を迎えたが、毎年売上枚数が増加しており両館で平成28年度41,221枚、前年比107.7%(累計185,788枚)という販売実績となっている。セット入場券の購入者に特典として配布している大阪城公園周辺マップ(日・英・中簡・中繁・韓の5言語)を継続発行し、周辺情報の追補などの改訂をおこなった。

8. 施設の維持管理

建物設備の維持保全のため空調をはじめとする電気、機械設備などの機器・装置の日常点検のほか、定期メンテナンス、法定点検などを実施し良好な施設設備の維持に努めた。

また経年劣化等による機器の不具合に対応し、空調関係機器の整備・改修、部品交換などを行った。展示場関係では、10階展示場のスライディングウォールの一部部品交換修理作業（29年度へ継続）を実施、常設展示場のディスプレイ機器の一部を更新した。

さらに、レストラン関係では、厨房内洗浄機と業務用自動炊飯器の老朽化による機器の更新、排気ダクトとファンの清掃等を行った。

また、館内外の日常的な清掃に努め、カーペットクリーニングなどの定期清掃を実施するとともに、建物の外壁補修を行うなど建物保全と美観確保に努めた。

防火・防災に関しては当館、NHK大阪放送局、ビル管理会社が一体となった訓練を2回実施し、非常時の対応について三者で確認を行った。さらに、震災時のインバウンド対策のとりくみとして、総合案内（委託業者）から外国語（英・中・韓）での館内アナウンスを試行的に実施したが、引き続き実効性のある災害時対策を講じていく必要がある。

9. 友の会 その他独自事業

友の会は、幹事会をはじめとした会員による自主運営に移行して3年目を迎えた。事業としては「熊野街道を歩く」「若狭の古墳文化を訪ねる」をテーマとした見学会など、計7回が行われ、260人の参加者があった。なお当館は、事業の企画や講師の派遣などをとおして友の会の活動支援を行った。なお、平成28年度の会員数は245名（家族会員を含む）である。

その他、独自の事業として、ジュンク堂書店大阪本店で、展示図録等の常備販売を実施した。

10. 文化庁補助金事業（多言語化の取り組み）

平成28年度 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」において、大阪市博物館施設の国際発信強化実行委員会に中核館として参画し、当館においては補助金で下記の事業に取り組み、情報発信、来館者サービスにおける多言語化を実施した。施設案内パンフレットについては既存の5言語（日・英・中簡・中繁・韓）に加えて、フランス語、スペイン語、タイ語、アラビア語版を製作し、1～3月には追加言語のパンフレットを約1,000部配布した。また、常設展示の解説パネルの一部、ボランティア事業として実施している体験学習（ハンズオン）の解説ツール、ホームページの一部については翻訳データを作成し、一部のパネル化も実施した。

29年度も引き続き補助金を活用し、多言語化等により外国人利用者への情報発信、来館者サービス向上に取り組む。

また、同じ補助金事業として平成28年度に実施した外国人アドバイザーによる協会内各施設点検における指摘事項や、総務部で実施した外国人観光客動向調査（平成29年度も実施予定）のアンケート結果をもとに、今後の外国人利用者への対応について検討を進める。

V 大阪市立自然史博物館管理運営事業

平成 28 年度は特別展を 2 回開催した。主催展として開催した「氷河時代－化石でたどる日本の気候変動－」展は、市民の関心が高い化石を通して気候変動を解説するテーマが受け入れられたと考えられ、2 万 5 千人を超える来館者を獲得できた。「生命大躍進－脊椎動物のたどった道－」展は、貴重な化石標本の展示と、NHK による番組広報との相乗効果もあって 10 万人を超える来館者を迎えた。常設展有料入館者数の増加（27,205 名）と、特別展有料入館者数の増加から類推すると、約 15,000 人の常設展有料入館者数がインバウンドの効果と見積もられる。

1. 資料の収集、保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じて海外からも収集した。収集した標本は低温燻蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。この数年間、新規資料は主として寄贈によって増加している。28 年度に寄贈を受けた主なコレクションは以下の通りである。

日本各地の魚類（鈴木コレクション）（11,614 点）、2016 年大阪湾一斉調査において採集された大阪湾沿岸の魚類（31 点）、ライオン・ダチョウなどの飼育哺乳類（天王寺動物園）（12 点）、台湾産などハネカクシ模式標本（6 点）、日本産昆虫（藤江コレクション）（8,000 点）、国内外産昆虫（北川コレクション）（2,952 点）、近畿産蘚苔類標本（200 点）、日本産菌類標本（上田コレクション）（180 点）、大阪府産菌類標本及び写真（約 300 点）、上町断層調査ボーリング資料（一式）。

平成 28 年度末の総資料数は 167 万 9,487 点である。（昨年度末比 34,854 点の増加）

なお、二次資料としての図書資料については、単行本の登録数は 2,344 部増で、総計は 17,908 部である。また、交換・寄贈によって受け入れた逐次刊行物は平成 28 年度に 9,533 冊増で当年度末現在の累計 207,839 冊である。

2. 展示事業

平成 28 年度の入館者数は、常設展 244,587 人（うち有料 114,468 人）、特別展 133,483 人（うち有料 60,493 人）であった。常設展、特別展を合わせた総入館者数は、378,070 人であった。常設展入館者は前年度比 113.8% で 29,765 名増、総入館者数も前年度比 114.6% で 48,043 名増となった。

小中学校の団体見学は全体で 470 校（平成 26 年度 417 校、平成 27 年度 460 校）、うち市内小学校 139 校、市内中学校は 60 校であった。直近 3 年間で見ると増加傾向にある。

(1) 常設展示

平成 28 年度には、2 月に実施された施設改修に伴う臨時休館期間を利用して、第 3 展示室の 1 コーナーの展示更新を実施したのをはじめ、以下の修理・更新を行った。

- ・ 第 2 展示室前 特別展氷河時代に使用した山岳氷河の模型を移設。セミの抜け殻展示は鞠公園の調査終了に伴い、ギャラリーから撤去した。

- ・第3展示室 20.A. 旅をする蝶

アサギマダラの移動記録を、日本列島と台湾など国外を移動した記録などを中心に最新の記録を盛り込み更新した。

- ・第5展示室 27.A, 38.Aなどの展示機器メンテナンス

- ・ナウマンホール プロジェクター更新、タッチPCの更新

- ・大阪の自然誌展示室 学習端末PCの更新

また引き続き満足度向上をめざして「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「ミニワークショップ（たんけんクイズ）」等の館内行事を実施し、来館者サービスに努めた。

(2) 特別展

①第47回特別展「氷河時代－化石でたどる日本の気候変動－」

＜会期＞ 平成28年7月16日（土）～10月16日（日） 81日間

近年、環境問題やエネルギー問題として、地球温暖化現象が市民の関心を集めているが、現在が氷河時代であることは広く知られていない。本特別展では地球46億年の気候変動史を、ここ数十年の研究成果を盛り込みながら化石や地質資料を用いて紹介した。特に、現在も含む新生代第四紀が氷河時代であり、氷期・間氷期が数十回繰り返したことを、大阪の地層やそこから見つかったさまざまな動物化石、植物化石を中心に紹介した。また、最終氷期の終わりから現在にかけての生物相や環境の変化についても扱った。この展示を通じて、地球温暖化現象を地球の気候変動史に位置づけて考えることを提案した。

内容（主な展示物）

導入・氷河時代とは：ヘラジカはく製（現生）とその生息地域である高緯度地方の風景写真

気候変動が起きるとどうなるの？：山岳氷河地形模型（氷期・間氷期）や植物化石、昔の気候はどのようにしてわかるのか？：化石（各種）、秋田スギ年輪、琵琶湖ボーリングコア、水月湖年縞ボーリングコア、氷河擦痕付き片麻岩、氷床コアレプリカなどを展示

気候変動はなぜ起こる：気候変動の原因となるさまざまな現象を、パネルを用いて簡単に説明した。

地球46億年の気候変動：縞状鉄鉱層の実物標本、植物化石や石炭の標本、和泉層群産動物化石（モササウルス、アンモナイト類など）、など。

現在も続く氷河時代－第四紀－：アズキ火山灰層剥ぎ取り標本、大手前ボーリングコアにみられる海成粘土層と非海成層、タカツキワニ、キシワダワニ、マチカネワニ、など。

最終氷期の日本列島：最ボーリング資料、海成砂層剥ぎ取り標本、凍結割れ目剥ぎ取り標本（北海道猿払村）、泥炭層剥ぎ取り標本および植物化石（滋賀県彦根市）、マンモス全身骨格及びオオツノジカ全身骨格（復元）、熊石洞産動物化石群（ナウマンゾウ、ヘラジカ、オオツノジカ等）、トラ化石など。

入場者：25394名（うち有料 9215名、35.3%）、フリーパス大人 225名、高大生 1名。

②特別展「生命大躍進－脊椎動物のたどった道－」

(NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿と実行委員会を組織し開催)

<会期> 平成28年4月16日～6月19日 57日間

生命は40億年という膨大な年月をかけて現在の姿を獲得してきた。その過程には、生命に飛躍的な進化をもたらした“いくつかの重要な出来事”があったと考えられる。それはたとえば「眼の獲得」「海からの上陸」「胎盤の獲得」などである。これらの生命進化の歴史は化石によって裏付けられる。

この特別展では、進化の歴史を振り返ることができるタイムカプセルと言える化石標本をわかりやすく展示することで、主題の理解を促す工夫をした。

なお本展は、平成27年7月の東京会場(国立科学博物館)をスタートして、名古屋、松山、大阪、岡山の5会場で開催された巡回展である。

〔主な展示物〕

カンブリア紀の「バージェス頁岩動物群」、シルル紀の海の支配者「ウミサソリ」、進化の謎を解明した胎盤を持つ最古の哺乳類「ジュラマイア」、奇跡的に95%の骨格が残る霊長類化石「イーダ」など国内外から集めた貴重な標本の展示に加え、精巧な復元模型、4K映像などを活用し、進化の背景にあるDNAについても触れながら分かりやすく解説した。

入場者：108,089人（有料51,278人、47.4%）、1日の最多入場者は6月19日（日曜、最終日）の4,578人。

③特別陳列、テーマ展示及びミニ展示

①ミニ展示「マツボックリ化石にミキマツ(*Pinus mikii*)と命名一名前が無くなった化石に新たな名前を与えるー」

期間：平成28年3月1日（火）～6月19日（日）

オオミツバマツ（三葉松の化石種）の化石を研究した結果、学名が変更されることになった。その変更の過程で、よく見つかる化石であるにもかかわらず名前を失ったものが発生し、その化石に対し、新たな名前として「ミキマツ」と命名した。研究の元になったオオミツバマツおよびミキマツの化石（当館所蔵標本）を展示した。

②特別陳列「三木博士が研究したメタセコイアの化石」

期間：平成28年10月29日（土）～11月20日（日）

場所：本館2階 イベントスペース

主催：公益財団法人大阪市博物館協会、公立大学法人大阪市立大学

1941年に三木博士により、メタセコイアが化石で発見されて75年、1946年に中国での生存が論文発表されて70年の記念行事の一環として行われた。メタセコイアの発見の元になった標本、中国でのメタセコイアの発見と日本での普及の歴史を展示了。

③日本甲虫学会・大阪大会開催記念展示「関西甲虫研究史」

期間：平成28年11月26日（土）～平成29年1月31日（火）

場所：本館2階 イベントスペース

主催：大阪市立自然史博物館、日本甲虫学会

関西には古くから町人文化が根付いており、甲虫の研究は今も昔も、主にアマチュア研究者らによって進められてきた。その一つである日本甲虫学会が自然史博物館で大阪大会を開催するのを機に、関西における甲虫研究の歴史を振り返る展示を行った。

④ミニ展示「ジュニア自由研究標本ギャラリー」

期間：平成 28 年 12 月 3 日（土）～平成 29 年 1 月 29 日（日）

場所：本館 1 階 ナウマンホール

小中高生が日頃から採集している標本や夏休みの自由研究を展示した。生き物や化石・岩石がテーマの作品を対象とし、関連する分野の学芸員による手書きの講評を付けた。

⑤ミニ展示「酉年展」

期間：平成 29 年 1 月 5 日（木）～1 月 31 日（火）

場所：本館 1 階入口横 展示スペース

2017 年の干支、酉年にちなんで様々なニワトリの展示を行った。よく見る茶色いニワトリ「ボリス・ブラウン」に加えて、地肌が真っ黒な「ウコッケイ」、頭頂部に長い羽根を持つ「ポーリッシュ」、「名古屋コーチン」など、いろいろな品種のニワトリのはぐ製を展示した。

⑥テーマ展示「植物標本のタネは地域の自然を救う！？～時を越えて発芽する植物標本のタネ～」

期間：平成 29 年 1 月 5 日（木）～4 月 9 日（日）

場所：本館 2 階 イベントスペース

主催：大阪市立自然史博物館、新潟大学教育学部

博物館の標本庫には 100 年以上前のものから近年のものまで、絶滅が危惧されている植物を含む数多くの植物の標本が収められている。標本にはタネ（種子）が残されているものも数多くあり、その中には休眠状態で今も生きているタネがあることが調査の結果分かってきた。これらのタネを集めて蒔くことによって、ある地域で絶滅してしまった植物や、減少してしまった遺伝的多様性を回復させることができると可能性がある。

上記のような標本を用いた植物の保全に関する最新の研究成果を紹介した。残されたタネの生存が確認された、大阪府では絶滅したと考えられているカワツルモやヒメヒゴダイの標本など、研究の重要な資料を展示した。

この展示には、文部科学省科学研究費助成金（課題番号 23701024、26350387）の支援を受けて行った研究成果の一部を使用した。

⑦館外での展示

■大阪府立中央図書館・大阪市立図書館での展示

特別展「氷河時代－化石でたどる日本の気候変動－」の広報および連携事業の一環として、大阪府立中央図書館および大阪市立図書館において、「出張！自然史博物館氷河時代展」を開催した。会場・日程は以下である。

大阪府立中央図書館	4月19日～5月9日
大阪市立住之江図書館	5月1日～5月31日
大阪市立生野図書館	6月1日～6月30日
大阪市立旭図書館	7月1日～7月20日
大阪市立東住吉図書館	7月22日～8月17日
大阪市立都島図書館	8月19日～9月14日
大阪市立北図書館	9月16日～10月19日
大阪市立中央図書館	6月3日～8月17日（うち6月17日～8月17日は小規模展示）

■「イチ押し！瀬戸内海の自然トピックス」

JSPS 科研費、基盤研究 A 課題番号 JP24240113「自然史系博物館等の広域連携による『瀬戸内海の自然探求』事業の実践と連携効果の実証」の事業の一環として以下の展示を行った。

●岡山県倉敷市 玉島市民交流センター

共催 倉敷市立自然史博物館・倉敷市立自然史博物館友の会
期間 平成28年8月9日～16日、来場者数は3,189人

●大阪府岸和田市 きしわだ自然資料館

共催 きしわだ自然資料館
会期：平成28年11月3日～11月29日、来場者数は1,300人

●山口県下関市 下関市立しものせき水族館「海響館」

共催：下関市立しものせき水族館「海響館」
会期：平成28年12月10日～平成29年1月9日、来場者数は46,566人

●香川県高松市 瀬戸内海歴史民俗資料館

共催：香川県立ミュージアム
会期：平成29年1月14日～2月05日、来場者数は545人

●大分県大分市 大分マリーンパレス水族館 「うみたまご」

共催：大分マリーンパレス水族館 「うみたまご」
会期：平成29年2月17日（金）～3月20日、来場者数は56,575人

3. 調査研究事業

調査研究は博物館活動の根幹をなすものであり、学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、平成29年度開催予定の特別展準備を兼ねた「瀬戸内海の総合調査」と研究成果を地元である瀬戸内各地で公開する巡回展、平成31年度の特別展開催に向けて市民と協同で進める「大阪を中心とした外来生物の影響プロジェクト調査」、などを実施してきた。

その成果の一部は特別展「氷河時代－化石でたどる日本の気候変動－」でも紹介したほか、館で刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、講演会を通じて市民に普及した。外来研究員も含む論文や著作数は、国際誌31件、国内誌46件、一般誌と講演要旨131件、図書3点であった。

市民に開かれた研究施設として、外部研究者の受け入れに関する要項により平成 28 年度は 57 名の外来研究員を受け入れた。収蔵標本や研究設備・機器を使って研究成果を公表するとともに、収蔵標本の充実にも寄与している。

28 年度は外部研究資金として文部科学省科学研究費補助金は 2,252 万円（分担研究・間接経費を含む）を獲得し、基盤研究 10 件（基盤研究 A 1 件、同 B 1 件、同 C 8 件）、若手研究 2 件、挑戦的萌芽研究 1 件の研究を進めた（外来研究員を含む）。また分担研究者として 4 件の研究を実施し、研究費（間接経費を含む）の配分を受けた。民間ファンドその他では、笹川科学研究助成、厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助研究、河川整備基金助成事業、水源地環境基金、琉球大学熱帯生物圏研究センター 平成 28 年度共同利用研究公募、屋久島環境文化財団による研究助成も採択され、338 万円の配分を受けた。

4. 教育・普及事業

市民が自然をより深く理解するためには、展示を見るだけでなく、野外で実物の自然に触れることも重要である。自然史博物館ではこのような観点から、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。これら普及教育事業の開催は 214 回、参加者総数は 32,195 人（昨年度は 26,537 人）であった（詳細は別紙資料編に掲載）。

また、行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。補助スタッフとして延べ 384 名の方々に協力いただいた。

5. 学校・市民等との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員や教員を目指す大学生・自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を計画的に実施してきた。学校向けには、展示解説や標本など博物館資料の貸出し、学校教育を支援してきた。また 8 月 3 日には「教員のための博物館の日」を、笹川科学研究助成を受けて開催し、参加者数は 121 名であった。小中学校の団体見学は合計で 470 校（市内小学校 139 校、市外小学校 215 校、市内中学校 60 校、市外中学校 56 校）であった。そのうち、学芸員による特別レクチャーは、保育所・幼稚園 1 件、小学校 10 件、中学校 3 件、高校 3 件、大学 4 件、専門学校 1 件合計 22 件であった。

大学生の博物館実習は、23 大学、のべ 39 名の学生を受け入れた。職場体験学習は、大阪府内の中学校 10 件、大学 1 件（合計 15 人）を受け入れた。

友の会会員を中心に 100 人以上の市民が参加するプロジェクト A「外来生物の影響調査」を実施中である。「認定 NPO 大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めている。

6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、より多くの市民に博物館を利用してもらうことを目的として取り組んだ。従来型の展示事業・教育普及事業のポスター

ー・チラシを中心とした広報に加えて、研究成果などのプレスリリース、Web・SNSを利用した広報に積極的に取り組んだ。

ホームページは、タイムリーで内容豊富な情報発信に努めている。平成28年度のHPアクセス数（トップページ）は約52.7万件で、昨年比11万件増。生命大躍進展、氷河時代展など来館者の多い時期とアクセス数のピークは一致している。HP掲載の新着情報を中心に「Twitter」、「Face Book」を通じて情報提供するなどしている。Twitterの発信数は477件、フォロワー数は3/31時点で6088(前年比1169人増)であり、広報媒体として良好に機能していることがうかがえる。FaceBookについては、情報がどのくらいの人に到達したかの指標でもある合計リーチ数が、昨年度が33万人だったのに対し、今年度は約39万人と増加している。博物館FaceBookページ単体でのリーチ数は19万人程度であり、シェアなどにより拡散されていることが伺える。また2017年1月からは英語版FaceBookページを開設し、不定期ながら外国からの来館者向けの情報提供を試みている。

昨年度から特別展の解説用に作成した映像などを動画投稿サイトYou Tubeに試行的に掲載しており、「氷河時代」展会場のギャラリートーク中継（抜粋）と準備風景は9カ月で2,260回の視聴になっている。各番組ともに100-300回再生され、少人数対象のギャラリートークをより多くの市民に楽しんでいただくことを可能とした。また特別展の内覧会には、特別展を宣伝協力いただくブロガーを招待し、市民参加型の広報を実施した。

地下鉄車内ガイド放送（最寄り駅案内）を、特別展開催時は特別展情報を案内して、地下鉄御堂筋線沿の利用者に対して広く博物館の存在を周知することができた。

7. 来館者サービスの向上

「花と緑と自然の情報センター」には、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーがあり、学芸員を配置して質問等にも対応し、多くの市民の学習の場になっている。また、本館ミュージアムサービスセンターには総務課スタッフを配置して学校対応や市民サークルへの窓口になった。常設展では、来館者向けイベントの「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」を実施し、多くの来館者から好評を得ている。

外国人旅行者・外国人居住者に向けた環境整備として、文化庁の平成28年度「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」において、大阪市博物館協会が申請、採択された「大阪市博物館施設の国際発信強化事業」により、懸案であった外国語案内パンフレット（英語、中国語繁体字、中国語簡体字、韓国語）を作成した。また、ホームページはこれまで英語のみであったが、日本語ホームページに対応させた4言語（英語、中国語繁体字、中国語簡体字、韓国語）のページを作成した。また、それらの内容をもとに、館内の表示を整備した。今後、これらを活用して来館者への情報提供をさらに充実させていきたい。

8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検を励行するとともに、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、隣接の長居パークセンターと協働で震災・防火訓練を実施した。平成 28 年度は大阪市により、本館屋上防水工事及び各室冷房設備の更新工事が実施された。

9. 友の会

自然史博物館友の会（28 会計年度は 1,720 名）は、昭和 30 年に大阪市立自然科学博物館後援会として発足した当初から、博物館と連携しながら市民と博物館をつなぐ役目を果たしてきた。その自然史博物館友の会を母体として平成 13 年には「NPO 大阪自然史センター」が発足し、現在は大阪自然史センターが友の会を運営している。友の会会員向けの観察会などを 39 回開催（のべ 2,594 名が参加）し、学芸員が観察指導を行った。友の会会員は、友の会が主催する行事に参加するだけでなく、博物館が開催する各種の普及教育事業にも積極的に参加し、行事を盛り上げてくれている。また友の会行事は積極的に公開し、一般の人々の参加も可能にしているので、参加者の満足度も高く、友の会への関心を高めることができた。

VII 大阪市立美術館管理運営事業

美術館では、展覧会にかかる事業が中心となって全体の事業が展開している。平成 28 年度は、本館の 80 周年にあたり、所蔵品・寄託品による特別陳列「大阪市立美術館 80 周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」を開催し、本館の所有・保管する名品を取り揃えて展示とともに、館の歴史やコレクションを丁寧に紹介した。また開館 80 周年を記念した大規模な自主企画の特別展「王羲之から空海へ－日中の名筆 漢字とかなの競演」と、海外からの大規模な巡回展「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」など 4 本の特別展を開催した。さらにコレクション展（平常展）では、それぞれの展示でテーマ設定を明確にし、来館者にわかりやすい展示に努めた。こうした展覧会の展示や講演・美術講座の開催などを通じて、市民の情操と知的好奇心を刺激し、学習支援とともに美術に対する関心を高めることにより、多くの来館者を得ることができた。一方、様々な展覧会や講演会・講座・論考、寄贈希望作品や新たな寄託品などのために作品の調査・研究を行い、来館者への情報提供を行った。また、作品の収集・保管・貸出をはじめ、施設と設備の維持管理にも万全を期すとともに、大阪市が実施した、外壁改修工事、空調設備整備工事等についても、滞りのないように様々な連携をしながら実施することができた。さらに、大阪市が平成 33 年度(2021)着工を目指している大規模な改修に対して、平成 29 年度に予定している基本計画策定の準備に美術館運営の実績等を踏まえ協力し、29 年度も引き続き協力・参画していく。

1. 資料の収集・保管事業

- ・近世絵画 2 件、近代日本画 3 件、近代洋画など 68 件、近代書跡 1 件、中国拓本 1 件、陶磁器 28 件、彫刻など 3 件（合計 106 件）の寄付申出作品に関する評価を行い、経済戦略局に上申して決裁後に台帳登録した。
- ・寄託作品は 168 件を受入れ、449 件を返戻した。
- ・国内外の美術館・博物館に 126 件（133 点）の作品貸出し起案決裁事務を行い、出版社などに作品の写真画像 139 件（142 点）を貸出した。
- ・中央収蔵庫の燻蒸作業を実施し、あわせて IPM（総合的有害生物管理）の一環としての防虫・防黴にかかる清掃作業も実施した。
- ・一昨年度の大坂市による施設の耐震補強工事において、南収蔵庫の東壁の改修を行った関係で、南収蔵庫の収蔵作品を北館 2 階陳列室に移動した。工事の終了をうけ、昨年度春に作品を収蔵庫に戻した。そのため、南収蔵庫にも燻蒸作業を実施して防虫・防黴対策をとった。

2. 展示事業

(1) コレクション展

美術館の所蔵する日本、中国等の東アジアの作品を中心としたコレクションのなかから、日常の調査研究や保存状況を考慮したうえで、作品を選定し展示を行ってい

る。

3回、のべ60日間開催した。年間を通したそれぞれのテーマについては、「肥前磁器の展開」「異郷の空」「源平物語絵」「中国四大美人?《明妃出塞図》を読み解く」「仏教美術-聖徳太子をめぐる美術」「菅原彦と赤松鱗作」「小さな妖怪たち」「大阪蔵鏡-中国古鏡の美」「近年の寄贈作品」「明清~近代の書画」「陶芸家・富本憲吉のデザイン」「硯箱の世界」「天神さま」の13テーマである。本年度も、館外の案内看板の一部にコレクション展の案内をのせ、展示室の解説パネル、題箋・作品解説などにも読みやすいフォントを使うなどの工夫をこらし、見やすさとわかりやすさにつとめた。なお、コレクション展全体の入場者は19,773人(特別展入館者を含む)であった。

平成28度は、80周年の特別陳列を開催して館蔵・寄託の名品をまとめて陳列したことにより加え、春には前年度の工事の影響で一部の展示室が使えなかったこと、夏から秋にかけてという暑い季節での海外からの借用展で厳しい温湿度管理が求められた(空調能力に余裕をもたすために、他の展示室を閉める必要が生じた)ことにより、展覧会の開催日が少なくなった。

(2) 特別展

学芸員の調査研究の蓄積を基礎に、利用者のニーズを踏まえながら魅力あるテーマを設定し、また全国を巡回する集客性が高く充実した内容の展覧会を誘致して特別展を開催した。

① 王羲之から空海へ一日中の名筆 漢字とかなの競演

[平成28年4月12日(火)~5月22日(日)の36日間、観覧者数66,921人]

主催: 大阪市立美術館・読売新聞社・公益社団法人日本書芸院

大阪市立美術館開館八十周年、日本書芸院創立七十周年の年にあたり、読売新聞社とともに、大規模な書の展覧会を開催した。王羲之から始まる書法の伝承を中国・日本それぞれ超一級の名品によって俯瞰するもので、大阪のみならず全国的にも空前の規模と内容を誇った。

中国書蹟では六朝から明末清初まで、王羲之の系譜に連なる名品約90件を、日本書蹟では空海ら三筆・三蹟や平安仮名の精品など約120件を、篆刻では中国の古璽と近代名家の作品約20件を展示した。特筆すべきは台北から借用した作品である。借用が極めて困難な國立故宮博物院からは宋・元・明時代の傑作が揃って日本初出品。何創時書法藝術基金會からは明末清初の大作が来日。国内からの借用作品には、国宝36件、重要文化財24件、重要美術品12件が含まれていた。

本展に対する反響は国内のみならず海外からも大きく、入館者数は大きく目標を超える、外国からの個人・団体客が多かった。また図録の評判も非常に良く、印刷した2万部がほぼ完売した。

② デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち

[平成28年7月9日(土)~9月25日(日)の68日間、観覧者数231,781人]

主催: 大阪市立美術館・関西テレビ放送・産経新聞社

デトロイト美術館(Detroit Institute of Arts、通称DIA)は、アメリカ合衆

国ミシガン州・デトロイトに所在し、古代エジプト美術から現代美術まで 65,000 点以上の作品を所蔵するアメリカを代表する美術館の一つである。1885 年に開館して以来、自動車業界の有力者らの資金援助を経て世界屈指のコレクションを誇る美術館として成長したデトロイト美術館は、年間約 60 万人が訪れている。コレクションの中核を成しているのは、モネ、ルノワール、ゴッホ、セザンヌ、マティス、ピカソなど印象派、ポスト印象派の作家による作品である。

本展では、こうした数々の傑作の中から、日本初公開 15 点を含む名作全 52 点を紹介した。日本人になじみのある画家の作品が目玉となり、夏休み期間を挟んだこと、テレビによる広報が功を奏したことなどにより、多くの来館者を得ることができた。

③第 62 回全関西美術展

〔平成 28 年 10 月 14 日（金）～10 月 26 日（水）の 12 日間、観覧者数 6,020 人〕

主催：大阪市立美術館・読売新聞社

全関西美術展は、昭和 16 年に大阪市民の芸術振興を目的として、公募による総合芸術展「大阪市展」として発足したが、現在は「全関西美術展」と改称して出品対象の地域を限定せずに、読売新聞社と共に開催している。今年度は 776 点の応募があり、544 点が入選し、無鑑査・招待作家の作品 323 点を含めて 867 点の作品を展示了。「デトロイト展」の開催期間の関係で、例年 7 月初旬前後に行っている展覧会会期を 10 月にずらしたためか、昨年より若干応募数が減少した。賞金の減額などにより開催経費の縮減を図った。

④特別陳列 大阪市立美術館 80 周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙

〔平成 28 年 11 月 8 日（火）～12 月 4 日（日）の 24 日間、観覧者数 13,942 人〕

主催：大阪市立美術館・朝日新聞社・産経新聞社・日本経済新聞社・毎日新聞社・読売新聞社

開館 80 周年を記念して、館蔵・寄託の作品から 288 件の選りすぐりの名品を展示了。本館の所蔵する作品の質の高さとその魅力を誇るのみならず、第一章：美術館小史「美術館とコレクション」、第二章：美術鑑賞入門「かたちをたのしむ 8・0・壺（はまるつぼ）」、第三章：日本美術 ①桃山人－肖像画レクリエム……というように各章にテーマを設けて、館の歴史と作品に親しみやすい展示に努めた。また、寄贈や譲渡を受けた旧コレクターの慧眼を理解していただけ るようにも配慮した。

予算規模は決して大きくなかったが、在阪五社の新聞社の協力を得られたこと や、ツイッターを活用したことなどもあり、日を追うごとに入場者が増してい き、海外からの来館者も多くみかけた。

⑤ 改組 新 第 3 回日展

〔平成 29 年 2 月 18 日（土）～3 月 20 日（月祝）の 27 日間、観覧者数 43,242 人〕

主催：大阪市立美術館・公益社団法人日展

一昨年度に様々な問題点の指摘を受けて組織改革を行って「改組 新 第 1 回」

として開催したが、今年度も日展所属の作家の作品やその年の入選作品による基本作品 247 点と、大阪・奈良・和歌山・兵庫の 4 府県の地元作家の入選作品 341 点、合計 588 点を展示了。

内訳は日本画 91 点、洋画 116 点、彫刻 50 点、工芸美術 77 点、書 254 点で、日展出品作家による作品解説を 16 回開催した。また、日展作家による作品プレゼント抽選会を毎週土曜日に 5 回開催した。

3. 調査・研究事業

- ・平成 28 年度に開催を予定した特別展「王羲之から空海へ一日中の名筆 漢字とかなの競演」、特別展「デトロイト美術館展大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」、平成 29 年度の開催を予定している特別展「木×仏像－飛鳥仏から円空へ 日本の木彫仏 1000 年」、特別陳列「－土佐光起生誕 400 年－近世やまと絵の開花」、特別展「ディズニー・アート展《いのちを吹き込む魔法》」について、作品情報の調査・研究を実施した。また、特別陳列「大阪市立美術館 80 周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」のために、館蔵・寄託の収蔵品について作品情報の再調査と整理などを行った。
- ・『大阪市立美術館紀要』17 号を年度末に発行し、当館学芸員 3 名による、館蔵品などに関する論文と、「大阪市立美術館 80 周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」の報告を掲載した。
- ・平成 25 年度に文部科学省による科学研究費対象施設と認められたが、平成 28 年度科学研究費補助事業として引き続き 2 研究を実施した。

4. 教育・普及事業

(1) インターン研修事業

陶磁器の分野について大学院生 1 人の研修生を受入れた。内容は館蔵・寄託の収蔵品の作品調査・整理業務を学芸員とともに実施した。

(2) 博物館実習

実習生として 21 大学から 45 名の大学生を 9 月 30 日（金）～10 月 7 日（金）の 6 日間受け入れて博物館実習を実施した。特別展「全関西美術展」に関する補助作業の実習、および工芸や書画の作品の取り扱いなどの講義・実習のカリキュラム内容で実施した。

(3) 記念講演会など（合計 53 回、総参加者数 6,569 人）

- ・特別展「王羲之から空海へ一日中の名筆 漢字とかなの競演」

記念シンポジウム 1 回	1,207 人
--------------	---------

リレー講座 11 回（当館学芸員 3 回、外部講師 8 回）	3,438 人
--------------------------------	---------

- ・特別展「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」

講演会 3 回（当館館長 2 回、外部講師 2 回、1 回は対談形式）	465 人
-------------------------------------	-------

- ・特別陳列「大阪市立美術館 80 周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」

美術講座 8 回（当館学芸員 8 回）	298 人
---------------------	-------

ギャラリートーク	8回	(当館学芸員 8回)	297人
・特別展「改組 新 第3回日展」			
作品解説	16回	(出品作家 16回)	864人
(4)普及イベント	(合計 2回、総参加者数 1,341人以上)		
・特別展「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」			
ショートレクチャー	2回	(当館館長 2回)	338人
親子ミュージアム講座	4回	(当館館長 4回)	263人
・特別展「改組 新 第2回日展」			
日展作家プレゼント抽選会	5回	(地元作家提供によるプレゼント抽選会)	
			(抽選券配布合計 750枚)

5. 学校・市民等との連携

(1) 小学校・中学校・支援学校の鑑賞授業 (合計 6回、総参加者数 486人)

- ・特別展「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」

小学校	1回	110人
中学校	2回	196人
支援学校	1回	24人

- ・特別陳列「大阪市立美術館 80周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」

小学校	2回	156人
-----	----	------

この内、瓜破東小学校(11月16日)の鑑賞授業については、大阪市博物館協会の学校連携として実施した。

(2)大学の美術史教育との連携 (合計 2回、総参加者数 112人)

- ・特別展「デトロイト美術館展 大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち」

1回	60人
----	-----

- ・特別陳列「大阪市立美術館 80周年記念展 壺中之展－美術館的小宇宙」

1回	52人
----	-----

(3)障がい者特別鑑賞会

三菱商事株式会社と連携し、普段なかなか美術館等に行きづらい障がいの方々がゆっくりと鑑賞できる特別鑑賞会を特別展「デトロイト美術館展」開催時の9月10日(土)に行い、207名の参加を得た。

(4)なにわの日記念 うえまちコンサート

美術館の地元、NPO法人まち・すまいづくりが、浪速区を中心に行っている「なにわの日」のイベントの一環として、10月1日(土)に第33回うえまちコンサート in 大阪市立美術館「美術館で日本叙情歌を」を開催し、254名の参加を得た。

(5)なにわの日記念 アトリエ澤野ジャズライブ

美術館の地元の浪速区、および浪速区役所のイベントの一環として、3月26日(日)に「なにわの日記念 アトリエ澤野ジャズライブ」を開催し、321名の参加を得た。

(6) 美術館へ行こう

- ・「春の親子写生会」を5月3日（火・祝）に行い、55人の参加を得た。
- ・夏休みに小中学生を対象とした絵画などの教室を7月21日（木）～23日（月）と7月27日（水）～7月29日（金）の2回開催し、それぞれ28人、24人の参加を得た。
- ・冬に大人向けの「石膏デッサン公開講座」を12月25日（日）～26日（月）に開催し、12人の参加を得た。

(7) 団体レクチャー

- ・学校やカルチャーセンターの団体鑑賞において、要望があつて対応可能な場合に限って20～30分程度のレクチャーを行つた。今年度は王羲之から空海展で4回、デトロイト美術館展で7回実施した。

6. 情報発信、広報宣伝

ホームページに展覧会の見所や展覧会場の写真などを掲載し、即時性のある情報を提供して、展覧会情報等をやさしく説明しながら案内ができるよう努めた。本年は文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成により、ホームページの多言語化（英・中簡・中繁・韓）を行い、また、スマートフォンからもより見やすくした。

平成28年度の美術館ホームページへのアクセス件数は、992,527件であった。

展覧会のポスター掲示やチラシの設置を、様々な広報協力をいただいているあべの地下街等の民間施設、及び各美術館・博物館に依頼し実施している。また、市営地下鉄の公共広報板への広告の掲出も行った。さらに、新聞社、放送局と連携し、新聞への記事掲載やテレビ放映にも努めた。

特別展ごとにマスコミの学芸部・文化部などに案内を送り、開会式の前に報道内見会を開催して、それぞれの展覧会の特質と見どころをギャラリートークなどにより行い、展覧会の広報宣伝の依頼を行つた。

また、グーグルアートへの作品画像の提供により美術館の優れたコレクションを世界にアピールすることができた。

また、天王寺公園エリアの魅力向上を目指して、大阪市や関係先と連携して、天王寺公園の魅力発信・情報発信に取り組んだ。「てんしば」運営の近鉄不動産と連携して、公園入り口付近のデジタルサイネージ及びポスター掲示板にて、当館の展覧会案内を広報した。

7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲートや「てんしば」から美術館への案内表示やJR天王寺駅の美術館案内看板の設置等、美術館へのアクセスを分かりやすくした。本年は、館内のトイレの洋式化を進め、クレジットカードの利用を開始するなど来館者へのサービスの向上を図った。

また、案内表示の多言語化など、来館者により親切な案内板の設置を心がけるとともに、お客様のニーズをくみ上げて、受付での荷物の預かりや障がいの方の館内案内等

を、必要があれば即時実践して、財団ならではのサービスを実施してきた。さらに、ゴールデンウイークやお盆休みに期間中に臨時開館を実施するなどサービスの向上に努めた。

8. 施設・設備の維持管理

警備・清掃・設備管理及び保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めている。職員による日常的な安全点検も励行した。

経年による施設や設備関係の老朽化が進み、大阪市とも連携しつつ維持管理にあたっている。本年は大阪市による、建物正面の外壁改修（東、南、北面）工事、空調設備の点検・改修などの工事を実施した。また、本館1階及び2階のトイレの便器を洋式化するなど施設の改善や維持管理に努めた。

9. 友の会

友の会ニュースを6回発行し、野外写生会を4回、基礎講座を5回開催した。また、友の会の展覧会として、7月12日から7月17日に夏季展、第52回友の会展を1月17日から22日のそれぞれ6日間開催した。

今年度の会員は446人で、昨年度から44人の減となった。

10. 美術研究所

美術研究所は、関西を基盤として活躍している質の高い画家が講師として日々の指導を行っている。

絵画コンクールを6回、研究所展覧会を1回、絵画作品批評会を2回、ジョイントセミナーを4回開催した。「美術館へ行こう」として小中学生を対象とした絵画教室を2回、親子を対象とした写生会を1回、大人を対象とした絵画教室を1回開催し、合計119名の参加を得た。

入所検定は4月、6月、9月、1月を行い、計35名の入所者があった。

その結果、平成28年度研究生は135人となり、前年度より2人増となった。

VII 大阪市立東洋陶磁美術館管理運営事業

平成 28 年度は、特別展として「没後 100 年 宮川香山」と「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」を開催した。特別展「没後 100 年 宮川香山」では、日本の窯業界での大きな変革期であった明治時代初期に西洋の焼成法などの導入によって輸出用陶磁器を制作し、陶芸では 2 人目の帝室技芸員として日本の近代陶芸を牽引した宮川香山（1842～1916）を重要文化財 2 点を含めた 149 点で紹介した。多くの万国博覧会に出品し数々の受賞を果たした香山を紹介することで、当時の日本のみならず世界の工芸の動向をうかがう展示となつた。

また、特別展「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」では、台北の國立故宮博物院から、汝窯の最高傑作であり、中国陶磁の名品中の名品といわれる「青磁無紋水仙盆」をはじめとした北宋汝窯青磁水仙盆 4 点と、さらに清朝の皇帝がその「青磁無紋水仙盆」を手本につくらせた景德鎮官窯の青磁水仙盆 1 点が初めて揃って海外に出品された。「人類史上最高のやきもの」ともいえる「青磁無紋水仙盆」をはじめ、「天青色」とも形容される典雅な釉色や端正な造形を特徴とする汝窯青磁の名品は、国内はもとより海外から訪れた来館者をも魅了した。

企画展「朝鮮時代の水滴 - 文人の世界に遊ぶ」では、硯に水を注ぐための道具である水滴を館蔵品のなかから 126 点厳選し、そこに硯、筆筒などの文房具や燭台、キセルなどの身辺の道具 13 点を加え、愛らしく美しい文房具の姿とともに、当時の文人たちの精神世界を紹介した。当時水滴が飾られた様子を理解するため、文房具や身辺の器を同時に展示して書斎の空間を再現し、さらに韓国を代表する写真家・眞本昌氏の作品も合わせて展示し、水滴の魅力を多角的に伝えた。

1. 資料の収集、保管事業

芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入について推進し、計 5 件（作品数 22 点、評価額 1,611 万円）の寄贈があった。

さらに、展示事業や調査研究用として、東洋陶磁その他美術に関する書籍等を収集した。

2. 展示事業

(1) 常設展示（平常展示）

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、季秉昌コレクションの韓国陶磁、日本陶磁の中から代表的作品を中心に約 300 点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示した。

（平成 28 年 4 月 1 日（金）～平成 29 年 3 月 26 日（日））

また、常設展示に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約 20～30 点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催した。

「李秉昌コレクション 韓国陶磁」 (平成 28 年 8 月 13 日(土)～11 月 27 日(日))

「宋磁の美」 (平成 28 年 12 月 10 日(土)～平成 29 年 3 月 26 日(日))

(2) 企画展示

企画展「朝鮮時代の水滴 - 文人の世界に遊ぶ」

(平成 28 年 8 月 13 日(土)～11 月 27 日(日)、開催日数 93 日、入館者数 18,152 人)

硯に水を注ぐための水滴は、筆・墨・硯・紙の文房四宝とともに文人の書斎を飾り、実用品でありながら、文人たちが机の上において愛でたものである。とくに朝鮮後期には、文芸復興の気運にともなって文人趣味が流行し、水滴も動物や果実、家形、山形をはじめとする多様な姿をそなえ、さまざまな文様がほどこされたものが数多く作られた。

本展では、朝鮮時代(1392～1910)の水滴を取り上げ、館蔵品のなかから厳選した 126 点に、硯、筆筒などの文房具や燭台、キセルなどの身辺の道具 13 点を加え、愛らしく美しい文房具の姿とともに、当時の文人たちの精神世界を紹介した。出品した水滴がすべて館蔵品で、その質の高さや量の豊富さに来館者から称賛の声があり、また水滴の特徴を生かした分類とともに、水滴が飾られた様子を理解するため、文房具や身辺の器を同時に展示し、参考となる古詩を表示し、書斎の再現によって水滴の魅力をより一層伝えようとした構成が、分かりやすいと好評だった。来館者アンケートによると、90.0%が満足と回答し、「様々な時代、様式の水滴を一堂に見ることができ有意義でした」「朝鮮の文人の書斎の雰囲気が伝わってきて良かった」「解説文も詩や古事由来を入れて上手に説明している」など、高い評価が寄せられた。

(3) 特別展示

①特別展「没後 100 年 宮川香山」

(平成 28 年 4 月 29 日(金・祝)～7 月 31 日(日)、開催日数 82 日、入館者数 52,201 人)

19世紀後半のヨーロッパでは万国博覧会が開催され、多くの国が産業品を出品して華やかな万国博覧会全盛期を迎えており、1867 年から参加した日本によってジャポニスムがヨーロッパの芸術活動に大きな影響を与えた。また、日本では明治時代に入って、西洋の技術の紹介によって大きな変革期を迎えていた。こうした激動期にあって初代宮川香山は伝統的な京焼の技術によって輸出陶磁を制作し、数々の万国博覧会で受賞をはたし“マクズ・ウェア”として絶賛を博した。また、当時のヨーロッパの名窯でも盛んに行われていた釉薬の研究にも邁進し、ロイヤル・コペンハーゲンなどとも影響を与え合うようになった。

本展では田邊コレクションを中心に、東京国立博物館や宮内庁三の丸尚蔵館などの代表作と資料の 149 点で初代宮川香山を紹介した。中でも当館では重要文化財「褐釉高浮彫蟹花瓶」と香山晩年の「褐釉高浮彫蟹花瓶」を並べ多くの方の好評を得た。また、新館ロビー全体を撮影スポットとし、緻密に作られた高浮彫の作品 4 点を、撮影可能とし SNS への投稿を呼びかけた。また、NHK の「日曜美術館」の本編(45 分)で紹介され、大きな反響を得た。

②「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」

(平成 28 年 12 月 10 日(土)～平成 29 年 3 月 26 日(日)、

開催日数 86 日、入館者数 46,259 人)

中国北宋時代(960～1127)末に宮廷用の青磁を焼成した汝窯は、「天青色(てんせいしょく)」とも形容される典雅な釉色と端正な造形を特徴とし、中国の青磁の頂点に君臨する。

本展では、台北の國立故宮博物院から、汝窯の最高傑作であり、中国陶磁の名品中の名品で、門外不出の「青磁無紋水仙盆」をはじめとした北宋汝窯青磁水仙盆 4 点

(うち 2 点が海外初公開、1 点が日本初公開)と、さらに清朝の皇帝がその「青磁無紋水仙盆」を手本につくらせた景德鎮官窯の青磁水仙盆 1 点が初めて揃って海外に出品され、日本を代表する汝窯青磁である当館の青磁水仙盆と歴史的な「再会」が実現した。初めて一堂に集った汝窯青磁を代表する青磁水仙盆の名品を通して、歴代の皇帝たちが愛した汝窯青磁の美の真髄を紹介することができた。また、展覧会内容の理解促進のため、ビデオ番組(約 14 分)と 4K 映像(約 12 分)を制作、館内で放映した。また、ホームページ上でも予告動画として提供、新たな広報戦略とした。また、本展に併せて、北宋汝窯青磁と同時代の北宋時代のやきものの名品を紹介する特集展「宋磁の美」を同時開催し、その中で、最近日本において新たに発見された汝窯青磁盞(個人蔵)を出品し、大きな話題となった。来館者アンケートによると、93.2%が満足と回答し、「まさかこの様な展覧会があるとは、夢にも思わなかつたです」、「遠方からこの為に来ました」、「天上から降りてきたかのような、神秘的な美しさもたたえたすばらしさでした」などの賞賛の声が多く寄せられた。本展覧会は NHK の「日曜美術館」の本編(45 分)でも大きく扱われた。なお、本展はイセ文化財団より 1200 万円の特別協賛や、チャイナエアラインなどの協力を得て開催された。

3. 調査・研究事業

展示事業に関する調査研究として、高麗青磁と関連のある中国の汝窯青磁の資料を収集した。また、東アジアにおける文人趣味や文房具に関する資料収集、さらに朝鮮時代の文房具の発掘資料など最新の資料調査を実施した。

また、韓国陶磁調査研究事業では「中後期高麗青磁の研究」をテーマとして韓国や中国の出土資料や窯址等の調査を行った。さらに、高麗青磁と中国の汝窯青磁の関連の様相をさぐるため、資料を調査してその成果を公開講座「北宋汝窯青磁と高麗青磁」で発表した。

なお、外部資金による研究では、科学研究費補助金等計 3 件(計 208 万円(間接経費含む))を獲得した。

4. 教育・普及事業

(1) 講演会等の実施

展覧会の内容の理解や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催した。

① 講演会

- ・特別展「没後 100 年 宮川香山」記念講演会

「宮川香山—博覧会の時代の中で—」伊藤嘉章氏（京都国立博物館副館長）

参加者 65 人

- ・特別展「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」記念講演会

「清朝宮廷伝世の汝窯」余佩瑾氏（台北 國立故宮博物院器物處處長）

他計 2 回、参加者計 144 人

- ・企画展「朝鮮時代の水滴-文人の世界に遊ぶ」記念講演会

「朝鮮時代・18~19 世紀における文人の書齋とその世界」西垣安比古氏（京都大学名誉教授） 参加者 72 人

② 講座

- ・ナレッジ・キャピタル（グランフロント）「東洋陶磁の魅力」出川哲朗（当館館長）

他計 10 回、参加者計 427 人

- ・企画展「朝鮮時代の水滴」記念講座

「朝鮮後期の文人文化と文房具—水滴を中心にして」 参加者 70 人

- ・特別展「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」記念講座

「宋代汝窯青磁に見る満釉支焼」唐小軒氏（吉林省博物院副院長） 参加者 71 人

- ・同 連続講座

「汝窯青磁水仙盆について」他計 3 回、参加者計 182 人

- ・李秉昌博士記念公開講座 10 「北宋汝窯青磁と高麗青磁」

余佩瑾氏（台北 國立故宮博物院・器物處處長）、李喜寛氏（韓国 前湖林博物

館・学芸室長）、出川哲朗、小林仁（当館主任学芸員） 参加者 190 人

③ アフタヌーン・レクチャー

- ・「國立故宮博物院南部院区の開館と当館館蔵品による二つの特別展」

小林仁 他計 3 回、参加者計 122 人

④ 学芸員による見どころ解説

- ・特別展「没後 100 年 宮川香山」重富滋子・宮川智美（当館学芸員）

計 9 回、参加者計 524 人

- ・特別展「台北 國立故宮博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」（※「イブニング・レクチャー」と題して、夜間開館時に展示室において実施） 計 5 回、参加者計 105 人

- ・企画展「朝鮮時代の水滴-文人の世界に遊ぶ」鄭 銀珍（当館学芸員）

計 2 回、参加者計 30 人

(2) 博物館学・実習

博物館学を開講する大学の団体見学 3 校 138 人（神戸大学、大阪芸術大、大阪市立大学）を受け入れ、当館学芸員がレクチャーを行った。

(3) ボランティアによるガイド事業

特集展の会期中、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによるギャラリーガイドを行った。計 39 回、参加者計 381 人

また、平日については、団体見学者の入館に際しガイド予約のあった場合にギャラリーガイドを実施した。計 4 回、参加者計 50 人

このボランティアガイド登録者 32 名に対し、ガイド事業の充実を図るため、展覧会ごとに学芸員が研修を行っている。

5. 各種団体との連携

協会の各館・所との連携強化を図るとともに、各種団体、学校等との連携により、効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実を図った（ポスター、チラシ、パンフレットの交換設置、掲載協力、相互情報提供等）。また、中央公会堂、中之島図書館、国立国際美術館、国際会議場等と連携し、水都大阪、中之島まつり、光のルネサンスなど中之島地域の活性化につながるイベントにも協力した。

6. 他の博物館等との連携

国内外の美術館、博物館、研究機関等との多角的な連携による共同研究、展覧会の共催、シンポジウム・研究会の開催等の事業協力を実行した。

- ① 台北・国立故宮博物院南院開館特別展への長期貸出の継続
- ② サントリー美術館・瀬戸市美術館との特別展「没後 100 年 宮川香山」の開催協力等
- ③ リンデン・ミュージアム・シュツットガルト「おいしい！日本の食」への作品貸出
- ④ ふくやま美術館、新潟市新津美術館、愛知県陶磁美術館との「ヘレンド」展開催協力

7. 情報発信・広報宣伝

ホームページ、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マス・メディアの活用などにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知した。グーグル・アートなどとの提携により、優れたコレクションを世界に向けて情報発信した。ホームページの年間アクセス数は 1,126,470 件であった。

そのほか、入館者に対するアンケート調査を展覧会ごとに実施し、入館者のニーズを把握して事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に活かした。

8. 来館者サービスの向上

27年度に行ったLAN工事により、今年度から館内で「大阪Free wifi」の利用が可能となつた。同時に、音声ガイドと外国語(英・中・韓)による作品解説等からなるBeacon送信機を利用したスマートフォンアプリの実証実験を年度を通じて行った。実証実験に対しては、使い勝手など様々な意見が寄せられ、実験の結果、現状の館内設備および同仕様のままでスムーズに使用ができないことが多かったため3月末に実証実験を終了した。

平成28年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」により、上記スマートフォンアプリ用に作成した音声ガイド用作品解説文を3か国語(英・中・韓)に翻訳し多言語音声ガイド実施のためのデータを作成した。

海外からの利用者に対しては従来、館内サイン・常設展キャプションなどについても英文を併記して対応してきた。近年では特別展・企画展の展示パネルなどについて、英語以外にも内容に応じた言語を加えるなどの工夫をしている。ホームページについても、4か国語(日・英・中・韓)の構成として情報を発信してきた。28年度はさらに、展覧会チラシ・配布資料の多言語化、受付での外国语対応スタッフの充実を図った。また、かねてより要望のあったクレジットカードによる入館料の支払いを可能とした。利便性が高まったことについて、特に海外からの利用者から好評である。

28年度1月、2月の9日間に企画調整課で実施した外国人観光客動向調査の結果においても、観光の一環としての来館ではなく、展覧会鑑賞が目的という割合が多く、展示に対しても高い評価を得ていることがわかった。

光のルネサンス期間中には19時までの開館時間延長を行い、その間担当学芸員による見どころ解説などを実施して来館者へのサービスに努めた。該当期間の展覧会の内容にも関係するが、例年に比較してある程度の入館者増となつた。

9. 施設の維持管理

入館者が安全かつ快適に施設を利用できるよう、建物設備の維持保全をはじめ、電気、機械設備などの定期点検等を実施し適切な維持管理に努めた。

警備・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、館職員だけでなく、警備、設備、看視・受付などの業務委託従事者や喫茶の従事者も一体となって避難訓練を実施し、有機的かつ効果的な防災体制の充実を図った。

また、館内地震対策についての他館との情報交換を機として、照明器具への対策を強化し、落下防止用ワイヤーの導入を計った。

10. 出版等事業

展覧会図録(特別展「没後100年 宮川香山」、企画展「朝鮮時代の水滴-文人の世界に遊ぶ」、特別展「台北 國立故宮博物院-北宋汝窯青磁水仙盆」、「宋磁の美」)の製作販売を行い、継続的に館蔵品図録(「東洋陶磁の美」、「堀尾幹雄コレクション濱田庄司」、

「掌中の美 沖正一郎コレクション鼻煙壺」など) やミュージアムグッズの販売を行った。

11. 友の会事業

講演会、研究会、研修や「友の会通信」の発行などを通して会員へ東洋陶磁に関する情報 提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図った。

・友の会講演会

「現代陶芸のあけぼの - 黎明期の作家たちとの交流」 笹山忠保氏 (陶芸家)

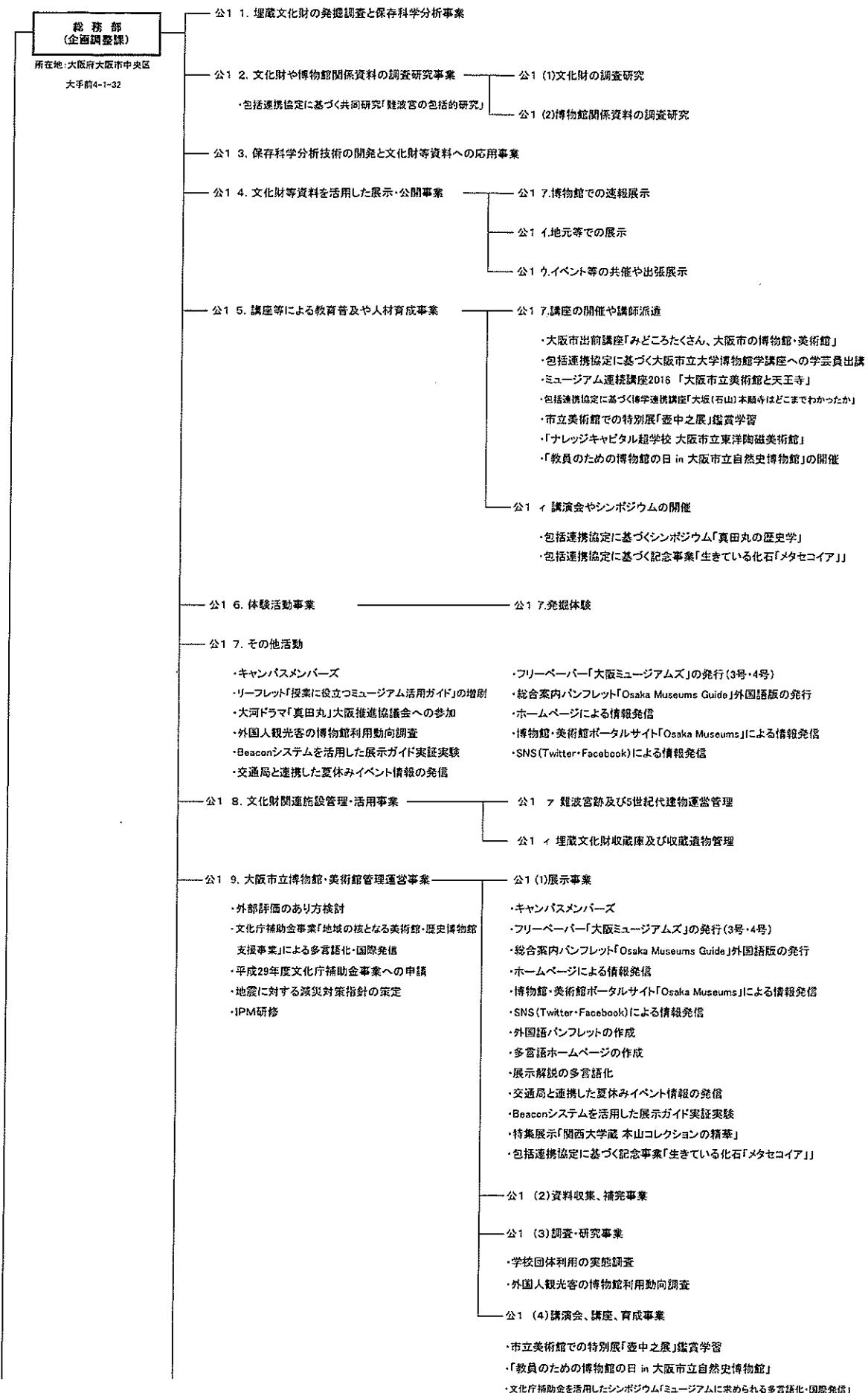
他計 2 回、参加者計 65 人

平成28年度[公益事業対照表]

1. 総務部企画調整課

当協会公益事業等の一覧										各館所との連携について									
事業報告書の事業名	1 埋蔵文化財の発掘調査と保存科学分析事業	2 文化財や博物館関係資料の調査研究	3 応用事業	4 文化財分析技術の開発と文化財等資料への活用	5 講座等による展示	6 体験等活動事業	7 その他活動事業	8 文化財関連施設管理・活用事業	9 大阪市立博物館・美術館管理運営事業	公1 (一) 展示事業 ア・常設展示	公1 (一) 展示事業 イ・特別展示等	公1 (二) 休憩事業	公1 (三) 調査・研究事業	公1 (四) 講演会・講座・販売事業	公1 (五) 体験学習事業	公1 (六) 学習相談事業	公1 (七) 体験学習事業		
1. 広報発信事業	フリーペーパー「大阪ミュージアムズ」の発行(3号・4号) ホームページによる情報発信 博物館・美術館ポータルサイト「Osaka Museums」による情報発信 SNS(Twitter・Facebook)による情報発信 総合案内パンフレット「Osaka Museum Guide」外国語版の発行 外国人観光客の博物館利用動向調査 交通局と連携した夏休みイベント情報の発信									○	○ ○							全館所	
2. 文化庁補助金による多言語化の取り組み	外国語パンフレットの作成 多言語ホームページの作成 展示解説の多言語化 シンポジウム「ミュージアムに求められる多言語化・国際化」									○ ○	○ ○							歴・自・文	
3. 民間事業者との連携、民間ノウハウの活用	Beaconシステムを活用した展示ガイド実証実験									○	○							東	
4. 教育普及に関する連携	(1)小・中学校との連携 学校団体利用の実態調査(通年) 市立美術館での特別展「釜中之民」鑑賞学習 「教員のための博物館の日 in 大阪市立自然史博物館」の開催 リーフレット「授業に役立つミュージアム活用ガイド」の増刷											○						全館所	
	(2)高等学校・大学との連携 キャンパスメンバー 包括連携協定に基づく大阪市立大学博物館学講座への学部員出講 包括連携協定に基づくシンポジウム「真田丸の歴史学」 包括連携協定に基づく記念事業「生きている化石「メタセコイア」」 包括連携協定に基づく連続講座「大阪(石山)本筋寺はどこでわかったか」 ミュージアム連続講座2016「大阪市立美術館と天王寺」の開催※ (※は下欄の事業と重複)									○	○							全館	
	(3)博物館・その他機関との連携 ミュージアム連続講座2016「大阪市立美術館と天王寺」の開催※ 大阪市出前講座「みどころたくさん」、大阪市の博物館・美術館」 大河ドラマ「真田丸」大阪推進協議会への参加 特集展示「関西大学蔵 本山コレクションの精華」 「ナレッジキッピタル超学校 大阪市立東洋陶磁美術館」 地震に対する減災対策指針 IPM研修									○								全館所	
5. 点検評価	外部評価のあり方検討										○								全館所
6. 外部資金の獲得	文化庁補助金事業「地域の様となる美術館・歴史博物館支援事業」の実施 平成29年度文化庁補助金事業への申請										○							全館所	

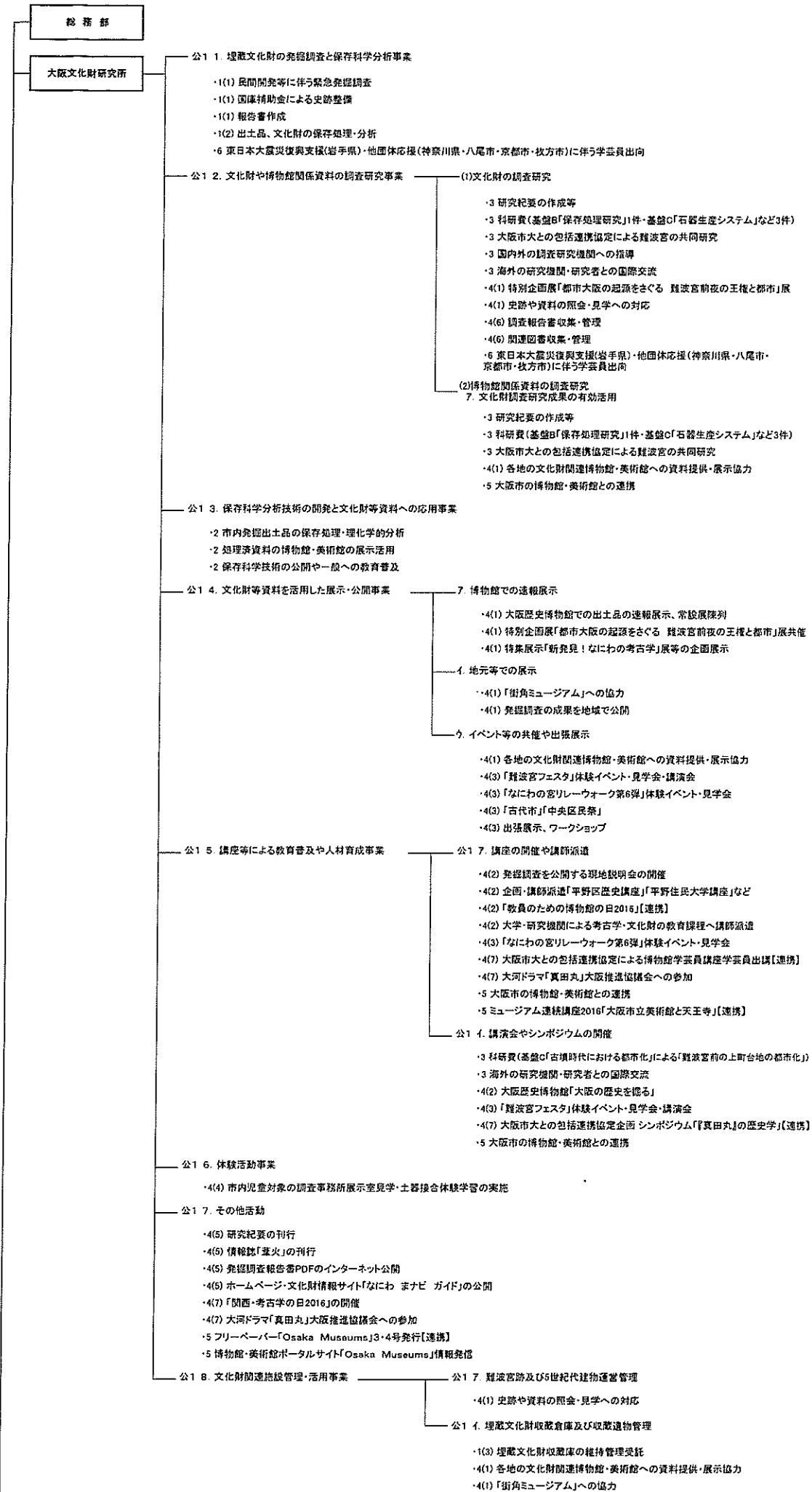
平成28年度 事業・組織体系図



平成28年度[公益事業対照表]

2. 大阪文化財研究所

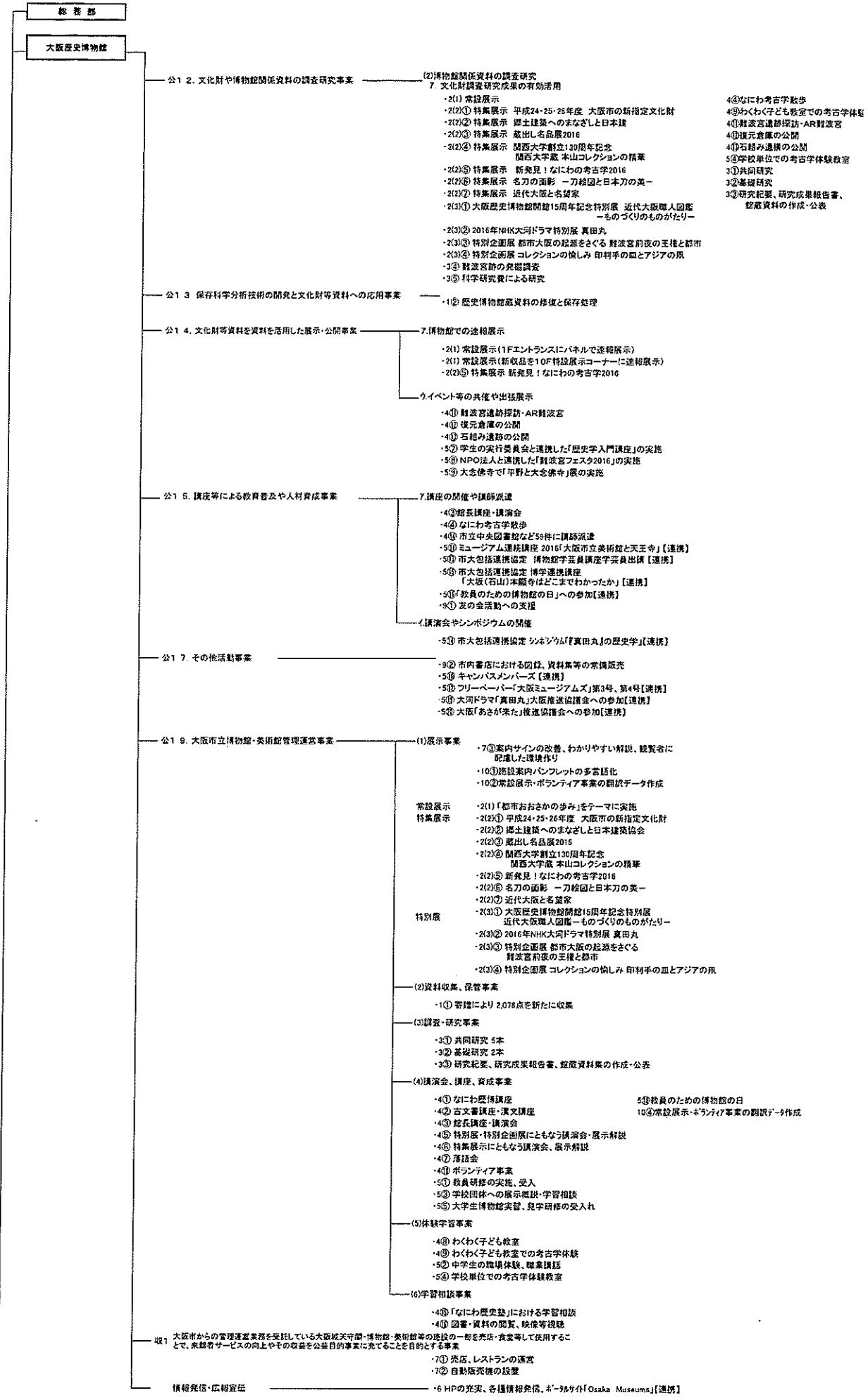
平成28年度 事業・組織体系図



平成28年度[公益事業対照表]

3. 大阪歴史博物館

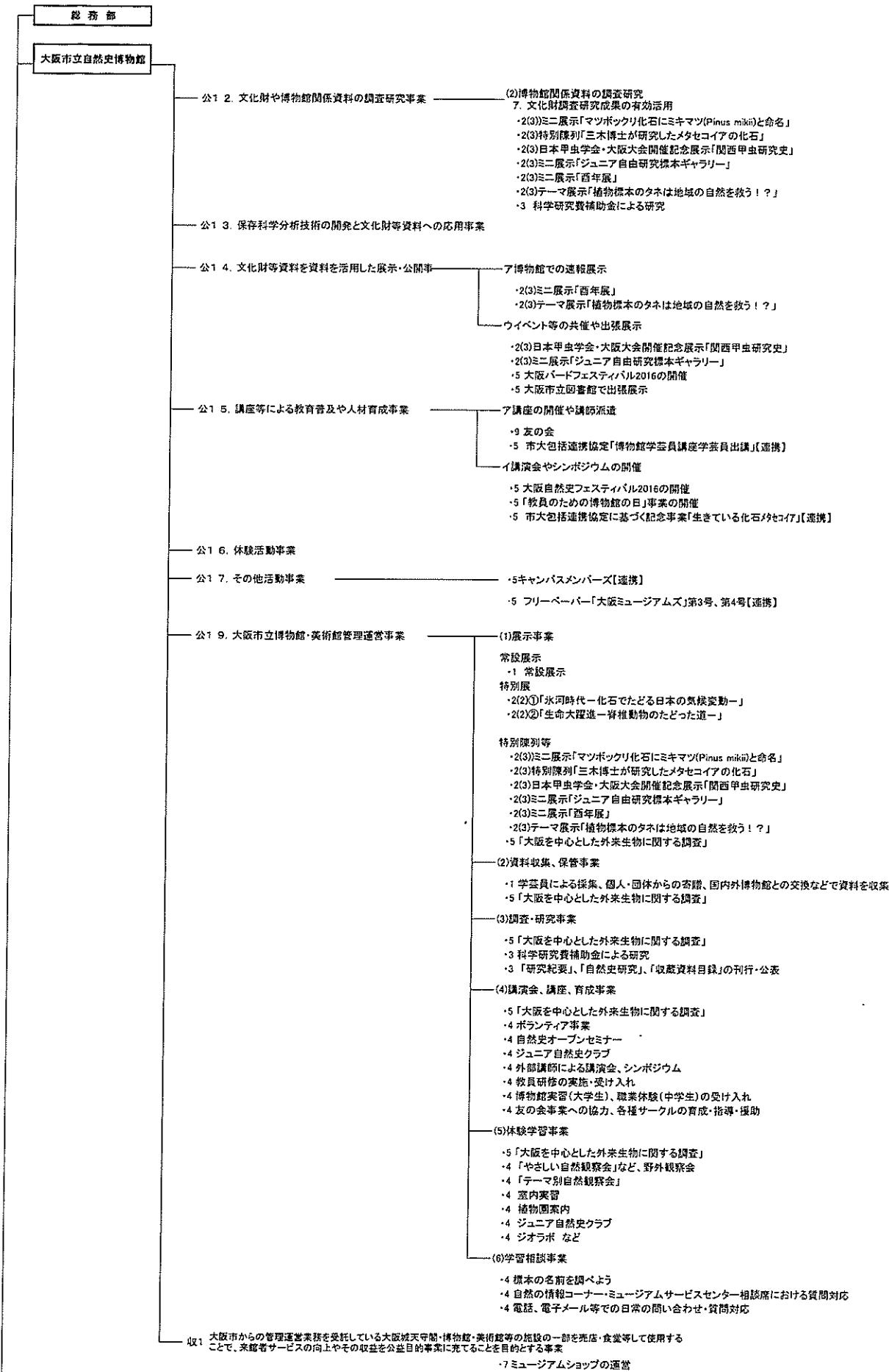
平成28年度 事業・組織体系図



平成28年度[公益事業対照表]

4. 大阪市立自然史博物館

平成28年度 事業・組織体系図



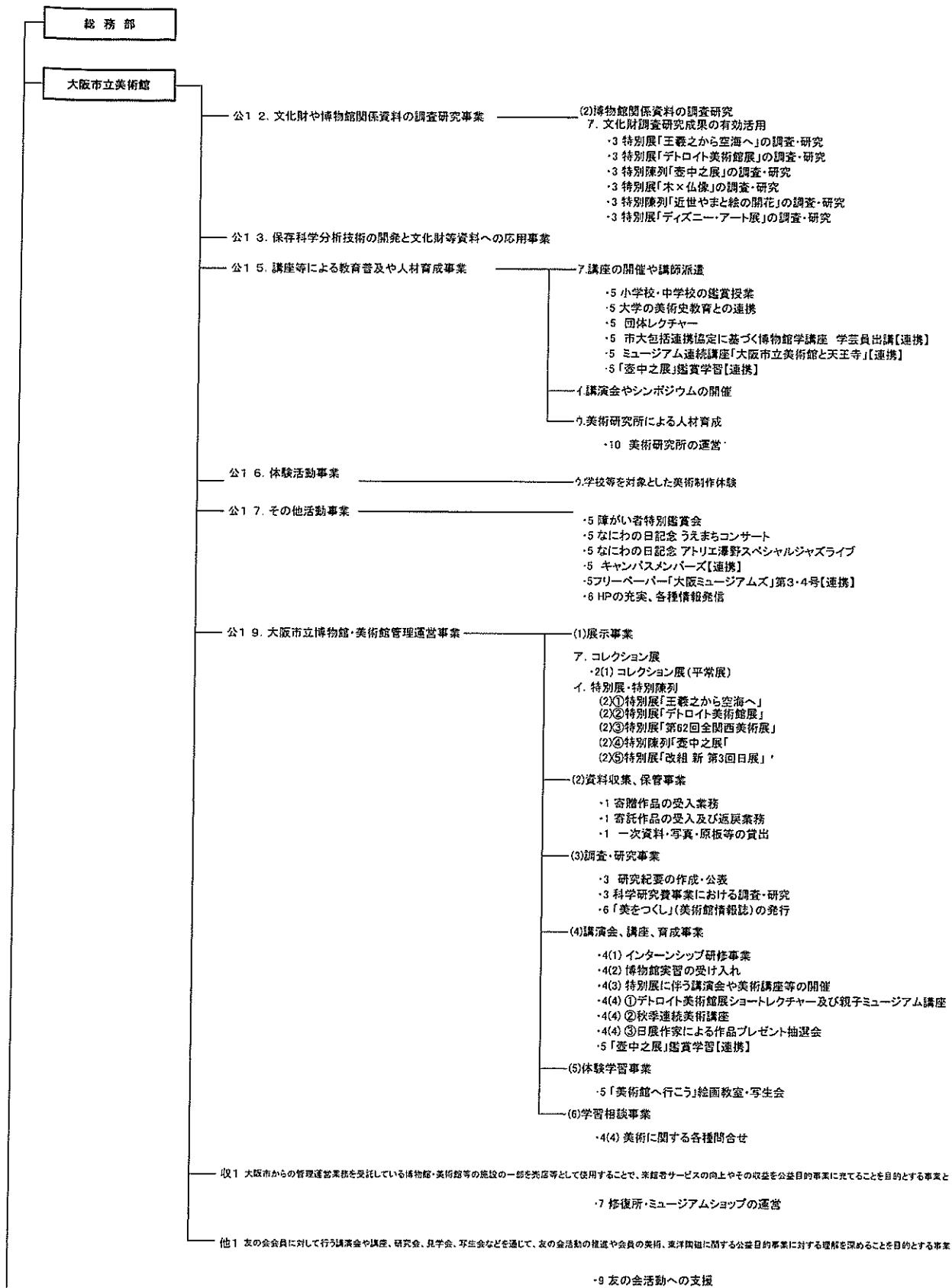
平成28年度[公益事業対照表]

5. 大阪市立美術館

当該会員公益事業等の一覧		公1										収1	他1
事業報告書の事業名		(1) 映画上映事業	(2) 講演会・講座・販促事業	(3) 調査・研究事業	(4) 資料収集・保管事業	(5) 体験学習事業	(6) 学習指導事業	(7) 大阪市立博物館・美術館管理運営事業	(8) 文化財関連施設管理・活用事業	(9) 大阪市立博物館・美術館管理運営事業	(10) (1) 展示事業	(11) (2) 特別展示	(12) (3) 研究・展示
1. 資料の収集、保管・貸出等事業		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
資料の受入業務 資料作品の受け入れ及び返却業務 一次資料の貸出起案決算業務、写真・原版等の貸出業務													
2. 展示事業		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(1)コレクション展(常設展) ①コレクション展(平常展)													
(2)特別展 ①特別展「王者之から空海へ」 ②特別展「デトロイト美術館展」 ③特別展「第62回全日本美術展」 ④特別展「笠置中之巻」 ⑤特別展「改組 新第3回日展」													
3. 調査・研究事業													
①研究紀要の作成・公表 ②特別展「王羲之から空海へ」の調査・研究 ③特別展「デトロイト美術館展」の調査・研究 ④特別展「笠置中之巻」の調査・研究 ⑤特別展「木々山房」の調査・研究 ⑥特別展「近世やまと絵の開花」の調査・研究 ⑦特別展「ティズニー・アート展」の調査・研究 ⑧材料研究費事業における調査・研究													
4. 教育・普及事業													
(1)インター研修事業 インターンシップ研修事業												○	
(2)博物館実習 博物館実習の受け入れ												○	
(3)記念講演会 特別展に伴う講演会や美術講座等の開催												○	
(4)普及イベント デトロイト美術館ショートレクチャー及び紙芝居ミュージアム講座 秋季資料収集講座 日展作家による作品プレゼント抽選会 美術に関する各種問合せ												○	
5. 学校・市民等との連携													
①小学校・中学校の授業事業 ②大学の美術史教育との連携 ③輝かい者特別鑑賞会 ④なにわの日記念えまらコンサート ⑤なにわの日記念アトリエ添野スベシャルジャズライブ ⑥美術館へ行こう 絵画教室・写生会 ⑦図書レクチャー ⑧「笠置中之巻」鑑賞学習【連携】 市大包括連携協定に基づく博物館学講座 学芸員出展【連携】 ミュージアム連携講座2010「大阪市立美術館と天王寺」【連携】 ギャンバシンパーズ【連携】 フリーペーパー「大阪ミュージアムズ」第3・4号【連携】		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
6. 情報発信・広報宣伝												○	
「美をつくし」(美術館情報誌)の発行 HPの充実、各種情報発信、eメール「Osaka Museums」【連携】								○					
7. 来館者サービスの向上													
修復所・ミュージアムショップの運営委託 案内サインの改善、わかりやすい解説等、見学者に配慮した環境作り 文化庁助成事業 HPの多言語化												○	
8. 招致・設備の維持管理												○	
9. 友の会	友の会活動への支援												○
10. 美術研究所	美術研究所の運営							○					

本表は、会員登録時に記入して行った講演会や講座、研修会に対する評議や企画会員登録としている美術館、美術館等の運営者等が、その権限を行使する事項に該当する事項を記入する用紙です。また、月次で大阪市から運営する公募企画等の実績を記入する用紙です。

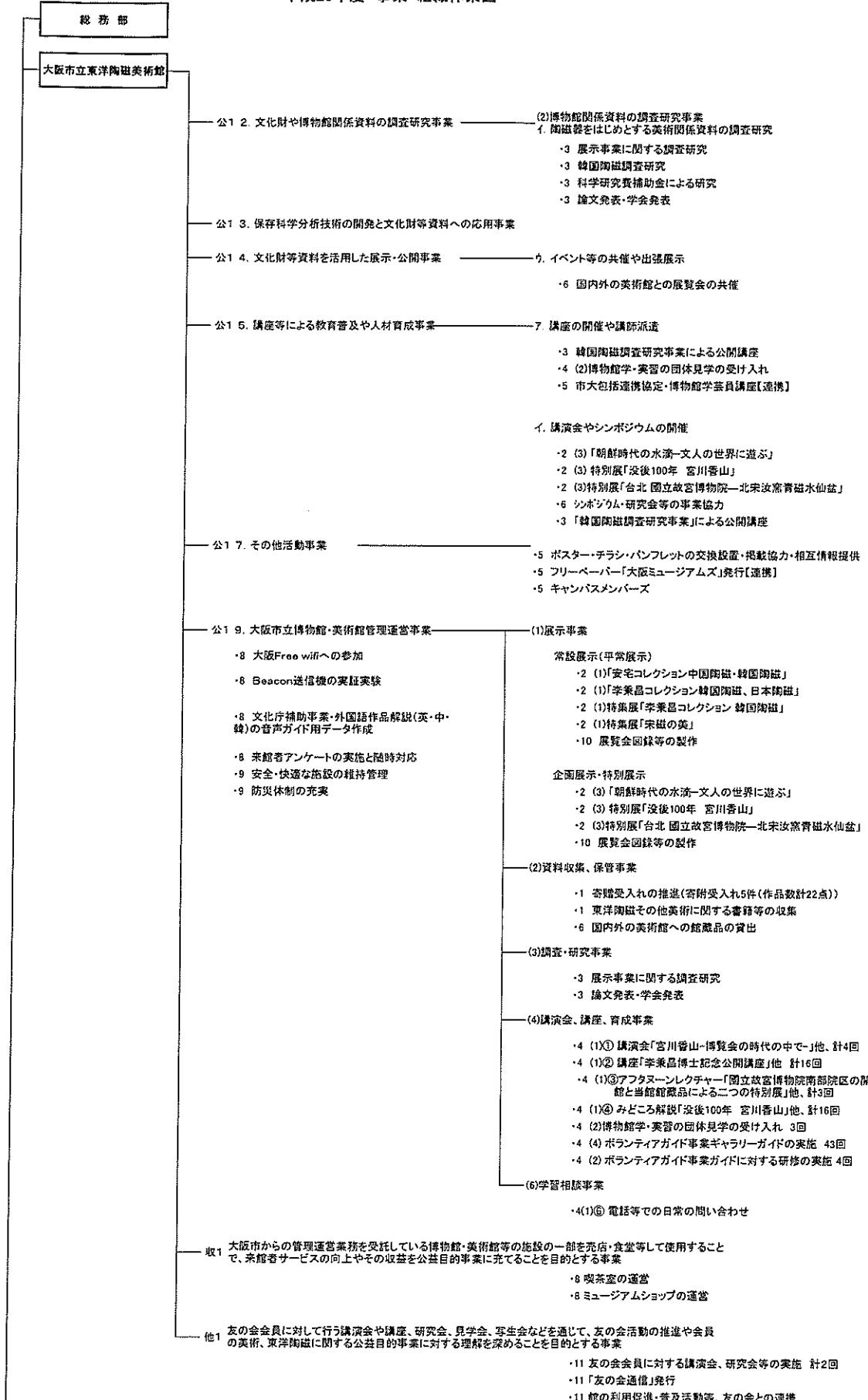
平成28年度 事業・組織体系図



平成28年度[公益事業対照表]

6. 大阪市立東洋陶磁美術館

平成28年度 事業・組織体系図



VIII 処務

(1) 処務事項

第1回理事会（決議の省略）	平成28年4月19日
第1回評議員会（決議の省略）	平成28年5月20日
第2回理事会	平成28年6月3日
第2回評議員会	平成28年6月22日
第3回理事会（決議の省略）	平成28年6月23日
第4回理事会	平成29年3月17日
第5回理事会（決議の省略）	平成29年3月31日

(2) 理事会及び評議員会に関する事項

会議名	開催年月日	開催場所／開催方法	議題
第1回理事会	平成28年4月19日	決議の省略	第1号議案 平成28年度第1回評議員会の開催について (1) 開催方法 決議の省略により開催する (2) 議題 評議員の選任、理事の選任について 第2号議案 銀持英樹評議員の辞任に伴う後任評議員として花澤隆博氏を候補者とすること 第3号議案 出川哲朗氏を理事の候補者とすること
第1回評議員会	平成28年5月20日	決議の省略	第1号議案 銀持英樹評議員の辞任に伴う後任として花澤隆博氏を評議員に選任すること 就任予定日は、平成28年6月1日 第2号議案 出川哲朗氏を理事に選任すること 就任予定日は、平成28年6月1日
第2回理事会	平成28年6月3日	大阪歴史博物館	第1号議案 経営計画の策定について 第2号議案 平成27年度事業報告について 第3号議案 平成27年度決算について 第4号議案 評議員会の招集について 報告事項 職務執行の状況について
第2回評議員会	平成28年6月22日	大阪歴史博物館	第1号議案 平成27年度決算について 第2号議案 評議員の選任について 第3号議案 理事・監事の選任について 報告事項 1 平成27年度事業報告について

会議名	開催年月日	開催場所／開催方法	議題
第3回理事会	平成28年6月23日	決議の省略	(1)下記の者を理事長に選定し、代表理事とする。 住所 大阪府大阪市土佐堀二丁目3番13-1101号 氏名 楠川義郎 (2)下記の者を専務理事に選定し、業務執行理事とする。
第4回理事会	平成29年3月17日	大阪歴史博物館	第1号議案 平成29年度事業計画について 第2号議案 平成29年度予算について 報告事項 職務執行の状況について
第5回理事会	平成29年3月31日	決議の省略	(1)大上一光を事務局長から免ずる (2)免職年月日 平成29年3月31日

(3) 理事及び監事一覧

平成29年3月31日現在

理事長	楞 川 義 郎	(公益財団法人大阪市博物館協会理事長)
専務理事	大 上 一 光	(公益財団法人大阪市博物館協会事務局長)
理 事	石 垣 忍	(岡山理科大学生物地球学部生物地球学科教授)
理 事	栄 原 永遠男	(大阪歴史博物館長)
理 事	谷 直 樹	(大阪市立住まいのミュージアム館長)
理 事	出 川 哲 朗	(大阪市立立東洋陶磁美術館長)
理 事	長 山 雅 一	(流通科学大学名誉教授)
理 事	福 永 伸 哉	(大阪大学大学院文学研究科教授)
監 事	伊 藤 由之助	(税理士)
監 事	島 村 美 樹	(弁護士)

(4) 評議員一覧

平成29年3月31日現在

評議員	坂 井 秀 弥	(奈良大学文学部文化財学科教授)
評議員	武 田 佐知子	(大阪大学名誉教授)
評議員	中 島 将 貴	(三井住友銀行総務部部長)
評議員	西 尾 方 宏	(西尾公認会計士事務所長)
評議員	花 澤 隆 博	(大阪市経済戦略局博物館改革担当部長)
評議員	山 梨 俊 夫	(国立国際美術館長)
評議員	吉 田 健	(NHK大阪放送局副局長)